



使徒行伝

からの教訓 (2)

Vol. 97 No.3

2021年7月-9月

目次

1. 苦難と希望	5
2. 教理を明らかにする	10
3. 聖霊によって導かれる	15
4. 地下牢の中での栄光	20
5. 思いと心へ訴える	25
6. 自給奉仕活動	31
7. 暗黒からの救出	36
8. 無我の宣教の働き	41
9. 長く苦難の下にいた使徒	46
10. 清い良心で証をする	52
11. 王に証言する	57
12. 嵐のただ中での信頼	62
13. 栄誉の鎖につながれて	67

安息日聖書教科は、他のコメントをいっさい加えず、完全に聖書と証の書のみに基づいた毎日の研究プログラムです。引用文は、簡潔で直接的な見解を提供するために、可能なかぎり短くされています。ある部分では、明瞭さや、適切な前後関係、また読みやすさのために〔 〕の括弧が使われています。抜粋されている原文をさらに研究することをぜひともお勧めします。

セブンスデーアドベンチスト改革運動世界総会安息日学校部 (P.O.Box 7240 Roanoke, Virginia 24019-0240, U.S.A.)

安息日聖書教科 Vol.97, No.2

編集&発行:
S D A改革運動日本ミッション

〒368 - 0071
埼玉県秩父郡横瀬町芦ヶ久保
1607 - 1

TEL : (0494) 22-0465

URL :
<http://www.4angels.jp>

E-mail:
sdarm.shomaru@gmail.com

イラスト: Illustrations: Good Salt on the front cover; RF123 on pp. 30, 72; Map Resources on pp. 4, 51, 72

まえがき

世界中の安息日学校の生徒たちが使徒行伝からの教訓の第二部を続けて学んでいく中で、感謝すべきことがたくさんあります。聖霊は初代教会と同じようにわたしたちも受けるのであり、またそれは、制限なく注ぎだされるのです。

「わたしたちは、使徒より熱心さが足りないであろうか。わたしたちは生きた信仰によって使徒たちの存在の深さまで彼らを動かした約束をわがものと主張し、主イエスに次のこのお方のみ言葉を成就してくださるよう呼び求めないのであるか。『求めなさい、そうすれば、与えられるであろう』(ヨハネ 16:24) ……」

御霊の力に満ちた弟子たちが福音を宣べ伝えるために出て行ったように、今日、神の僕たちも出て行くのである。過ちと不信仰の闇の中にいる人々に憐れみのメッセージを伝えたいという無私の願いに満たされて、わたしたちは主の働きにとりかからなければならない。このお方はわたしたちにご自分と協力してなすべき役割を与えておられる。そしてまた、かなたの地域にご自分の働きが進められるように、不信者たちの心を動かして下さるのである。すでに多くの者が聖霊を受けており、もはや気だるい無関心によって道がふさがることはない。

もし弟子たちが聖なる熱心さをもって、聖霊によって生き生きと、活力を与えられて働いたときの歴史のこの記録から、今日主の民がこのお方のために真剣に働くための靈感を得るのでなければ、なぜ、それが記録されたのであろうか？主が当時ご自分の民のためになされたことは、まったく同様に、そしてそれ以上に、今日、ご自分の民のために重要不可欠である。使徒たちがしたことはみな、今日すべての教会員がなすべきである。悪の増加が悔い改めを求めるもっと断固とした召しを要求しているため、わたしたちははるかにもっと熱心に、はるかに大きな度合いで聖霊に伴われなければならない。

現代の真理の光に照らされているすべての人は、闇の中にいる人々のための同情にかきたてられるはずである。すべての信徒から、光が明確に区別された光線のうちに反映されなければならない。主がペンテコステの日の後にご自分の代表者として選出された使命者たちを通してなされたのと同様な働きを、主は今日なそうと待っておられる。万物の終わりが間近に迫っているこの時に、教会の熱心さは、初期教会のときに勝るべきではないだろうか。神の栄光のための熱心が、強力な力で真理を担うために弟子たちを動かした。この熱心さがわたしたちの心を、キリスト、しかも十字架につけられたキリストの贖いの愛の物語を告げたいとの切望で燃やすべきではないだろうか。神の力が、使徒たちの時代よりも今日もっと強力に表されるべきではないだろうか？」(教会への証 7 巻 32, 33)

「兄弟たちよ、働きなさい、あなたに機会がある間に、日が続いている間に働きなさい。なぜなら、『夜が来る、するとだれも働けなくなる』からである。その夜がどれほど早く来るか、あなたは言うことができない。今があなたの機会である。それを活かしなさい。」(同上 5 巻 732)

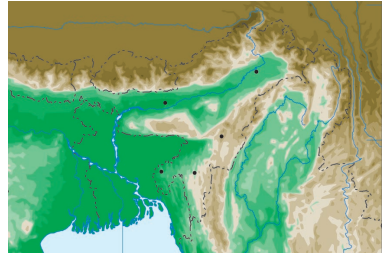
世界総会安息日支部

第一安息日献金

インド、アッサム、ディブルガルの礼拝堂と教会学校のために

改革のメッセージが、1980 年代に D. スレッシュクマール兄弟がインドの北東地域で人々のために奉仕していた時にインドの北東部へ伝えられました。神の恵みによって、ディブルガルの最北部に兄弟が継続しています。ディブルガルは、一部石油産業として知られ、また一方では紅茶農園の広大な一部に位置し、様々な先住の紅茶部族が生活し、働いています。

ディブルガルはアッサム州にあって、ちょうどブラマプトラとバラク・リバー谷沿いに東ヒマラヤの南部にあります。この州はおよそ 78,438 平方キロメートル (30,285 平方マイル) に及び、北部はブータンやアルナチャル・パラデシュに、東部はナガランドとマニプールに、南部はメガラヤ、トリプーラ、ミゾラン、およびバングラデッシュに、そして西部はインドの残りの部分に面している 22 キロ (14 マイル) の細長いシリグリ廊を経て西ベンガルに面しています。



アッサムは世界で人口密度が最も高い郊外の一つで、およそ 3100 万人の人々。過去 10 年で 17% ほど増加の一の居住地となっています。2011 年の人口調査によれば、61.47% がヒンズー教徒、34.22% がイスラム教徒、3.7% が少数派のクリスチャンとなっています。他の宗教には、ジャイナ教 (0.1%)、仏教 (0.2%)、シーク教 (0.1%)、精霊信仰があります。公用語で最も一般的なのが、アッサム語、続いてベンガル語です。

紅茶園の地域社会にはおよそ 650 万人の魂がいて、そのうち 400 万人がアッサム州の紅茶栽培地域に広がる 799 の茶農園のうちに建設された住宅地域に住んでいます。その他の 250 万人は、ちょうどその向こうにある近くの村に住んでいます。彼らは一つの倫理集団ではなく、むしろ様々な倫理集団であり、アッサム語の影響を受けた様々な文化を持つ何十もの言語を用いるグループで構成されています。

わたしたちの目的は、ディブルガルに礼拝堂と教会学校を建設することによって、ここでの福音伝道を促進することです。この主への記念塔は、この地域のための輝く光となることでしょう。わたしたちには皆さんの援助が必要です。そのため、すべての兄弟、姉妹、青年たちに、この事業に惜しみない献金をお願いいたします。「こうして、あなたがたはすべてのことに豊かになって、惜しみなく施し、その施しはわたしたちの手によって行われ、神に感謝するに至るのである」(コリント第二 9:11)。皆さんのご親切な援助に感謝し、温かい敬意を表します。

ディブルガルの皆さんの兄弟姉妹より

苦難と希望

暗唱聖句：「弟子たちを力づけ、信仰を持ちつづけるようにと奨励し、『わたしたちが神の国にはいるのには、多くの苦難を経なければならぬ』と語った。」(使徒行伝 14:22)

「彼は、救い主について語ったり、また、困っている人を助けたりする機会を見失わなかった。彼は各地に行って、キリストの福音を宣べ伝え、教会を設立した。」(患難から栄光へ下巻 48)

推奨文献： 患難から栄光へ上巻 194-202

日曜日

6月27日

1. 信仰の結果

- a. キリストの弟子たちが自分たちの信仰のための迫害からイコニオムを逃れることを余儀なくされた後、彼らはルステラで何に遭遇しましたか (使徒行伝 14:8)。

「わたしたちは常に苦しみを和らげ、困っている人々を助ける準備ができていべきである。」(教会への証 6 巻 360)

- b. その男がパウロの話を聞いていた時、使徒は彼について何を認めましたか。そしてその結果として何が起こりましたか (使徒行伝 14:9, 10)。

「パウロが、病気で苦しんでいる者をいやしてくださるかたとしてのキリストの働きについて、人々に語っていると、彼は聴衆の中に足なえがいるのを見た。その男はパウロにじっと目を注いでいたが、彼の言葉を受け入れ信じた。パウロはこの苦しんでいる男に心から同情した。そしてこの男に『いやされるほどの信仰が』あるのを認め、偶像礼拝者たちが集まっている目の前で、パウロは足なえにまっすぐに立ちなさいと命令した。これまでこの病人は座る姿勢しかとることができなかったが、即座にパウロの命令に従い、生まれて初めて自分の足で立ちあがった。この信仰の努力とともに力がわきあがり、足なえであった男は『踊り上がって歩き出した』」(患難から栄光へ上巻 195)

2. すべての栄光を神へ

- a. ルステラの人々はこの奇跡を見たときにどのように反応しましたか（使徒行伝 14:11-13）。

「群衆はパウロのしたことを見て、声を張りあげ、ルカオニヤの地方語で、『神々が人間の姿をとって、わたしたちのところにお下りになったのだ』と叫んだ。この言葉は、神々が時々地上をおとずれるという彼らの伝説に一致するものであった。彼らはバルナバを、神々の父であるゼウスと呼んだ。彼が徳の高い容貌に威厳のあるあごひげを蓄え、穏やかな慈悲深い表情をしていたからである。パウロは熱心で行動的であり、警告や訓戒の言葉を雄弁に用いて『おもに語る人なので』彼らはパウロをヘルメスだと信じた。」（患難から栄光へ上巻 195）

- b. 使徒たちがすべての栄光を神に帰すことに確固としていたことを、何が表していますか（使徒行伝 14:14-18）。

「ルステラの人々は、感謝の気持ちを示したいと熱望し、使徒たちに敬意を表すようにゼウスの祭司を説き伏せた。そこで祭司は『群衆と共に、ふたりに犠牲をささげようと思って、雄牛数頭と花輪とを門前に持ってきた』。パウロとバルナバは、人々の前から退いて休息しようとしていたので、そんな準備には気づかなかった。しかしまもなく、彼らは音楽の音と群衆の熱狂した叫びに気がついた。群衆が彼らの滞在している家の前にきていたのである。

使徒たちは群衆のやってきた目的と興奮した様子を知って、それ以上の行為をやめさせたいと思い『上着を引き裂き、群衆の中に飛び込んで行』った。

自分たちは神ではないと使徒たちが極力否定したにもかかわらず、また、礼拝すべき唯一のおかたである真の神へ、人々の心を向けようとパウロが努力したにもかかわらず、犠牲をささげようとする異教徒たちの気持ちを変えることは不可能に近かった。ふたりが本当の神だという彼らの信念は固く、またその熱狂は大変なもので、自分たちの誤りを認めようとしなかった。……

パウロがよくよく言いかけ、自分とバルナバは天の神と、偉大な医者である神のみ子とを代表する使命をもっている者だと懸命に説明すると、ようやく人々は自分たちの計画をとりやめる気になった。」（同上 195-197）

3. 悪意のある噂によって一掃される

- a. 何がルステラの人々の心が福音を受け入れるのを妨げ、またどのように彼らの行動が変わったのかを説明しなさい (使徒行伝 14:19)。

「反対するアンテオケのユダヤ人たちは、彼らの影響力によって使徒たちがその地方から追い出されたのであったが、あるイコニオムのユダヤ人たちと団結して、使徒たちの後を追った。足なえに行われた奇跡とそれを目撃した人々に及ぼした影響によって彼らの嫉妬心がかきたてられ、彼らは使徒たちの働きの場合へ行って、その働きに彼らの偽りの説明を加えた。彼らは神が関わっておられることを否定し、これらの人々が仕えている悪霊を通してそれが成し遂げられたのだと主張した。

同じ種類の人々は以前、救い主が悪の君の力によって悪霊を追い出していると非難したのだった。彼らはこのお方を詐欺師だと言って訴えた。そして今彼らはこのお方の使徒たちに対して同じ理不尽な怒りをもつてのぞんだ。虚偽という手段によって、彼らは自分自身が動かされたのと同じ敵意の精神をルステラの人々に吹き込んだ。彼らはパウロとバルナバの経歴と信仰を完全に熟知していると宣言し、そして、彼らの品性と働きを偽り伝えることによって、彼らを神聖な存在として拝もうとしていたこれらの異教徒に、今や使徒たちは殺人者よりも悪く、だれでも彼らをこの世から追い出す人は神と人類に良い奉仕を捧げることになると思わせたのであった。」(パウロの生涯からのスケッチ 59)

「真の神に対する信仰と、神に帰すべき礼拝と栄光の最初の理解が、彼らの心の中に形造られつつあった。そして、彼らがパウロの言葉に耳を傾けている間に、サタンは、他の町々の不信仰なユダヤ人に働きかけて、彼のあとをつきさせ、パウロの行ったよい働きを破壊させようとした。……人々の驚きと賞賛は、今や、憎しみにかわった。」(初代文集 340)

「ルステラの人たちは、使徒たちに犠牲をささげる特権を拒絶されて失望したことから、ふたりを神として歓呼しようとしたときと同じ熱狂ぶりで、こんどはパウロとバルナバに反対しようとした。ユダヤ人に扇動されて、彼らは暴力をもって使徒たちを襲撃しようとした。ユダヤ人たちは、パウロに話す機会を与えないようにと彼らに命じ、もし彼らがパウロにこの特権を与えるなら、パウロは人々に魔法をかけるだろうと断言した。

まもなく、福音の敵どもの殺人計画は実行された。ルステラの人々は悪の力に屈服していたので、サタンの怒りに満たされ、パウロをつかまえて情け容赦なく石を投げつけた。」(患難から栄光へ上巻 197, 198)

4. 奇跡的に強められる

- a. ルステラの人々がパウロに背を向けた方法によって表されているように、イエスは前もってご自分の民に何を予告しておられましたか（ヨハネ 16:1-3, 4（前句））。

「終わりの時に神のみ言葉の真理を信じて教える人々は、真理を受け入れない人、そして偽ることをためらわず、神が世界に警告のメッセージを伝えるために送られた人々の感化力を破壊し道をふさぐためには、最も明白な偽りでさえ広める無節操な人々から〔パウロがルステラでなされたように〕同じような反対に出会うであろう。ある階級の人々が偽りを作り出し、それらを言い広めている間、他の階級の人々はサタンの欺きによって盲目にされ、それらを真理の言葉として受け入れるようになる。彼らは大敵の網の中にいながら、自分たちは神の子であるとうぬぼれている。『そこで神は、彼らが偽りを信じるように、迷わす力を送り、こうして、真理を信じないで不義を喜んでいたすべての人をさばくのである。』（パウロの生涯からのスケッチ 60）

- b. 主はどのようにルステラでの苦しく厳しい経験の中でパウロを肉体的にも霊的にも奇跡的に力づけてくださいましたか（使徒行伝 14:20, 21（上句））。またこのお方は、どのように使徒を用いて、そこにいる新しい信者を力づけられましたか。

「パウロとバルナバの伝道によって、イエスの信仰に導かれたルステラの信者の群れは、この暗黒の試練の時にも忠実で真実だった。彼らの敵の理由のない反対と残酷な迫害は、このような敬虔な兄弟たちの信仰をますます固くさせるのに役立ったただけだった。そしていまや、危険と嘲笑に直面しながら、彼らは、パウロが死んだものと信じて、悲しみながら彼のからだのまわりに集まることによって、彼らの忠誠心を表した。

ところが驚いたことに、彼らが嘆き悲しんでいる最中に、パウロは突然頭を持ちあげ、神をさんびしながら立ちあがった。神のしもべが思いがけなく生き返ったことは、信者たちには天来の力の奇跡と考えられ、自分たちの改宗に天の神が認証の印を押されたように思えた。彼らは言い表しようのないよろこびにあふれ、新たな信仰をもって神をほめたたえた。」（患難から栄光へ上巻 198）

5. 信者の世話をする

a. 何がパウロの許しの精神を表していますか（使徒行伝 14:21（下句）, 22）。

「パウロもバルナバも、彼らが最近伝道した町々の改宗者たちの信仰を固めないで、別の場所で働きを始めることには満足しなかった。というのは、彼らは改宗者たちをそのまま放って、余儀なくそれらの町々から出てきていたからである。そこで彼らは、危険にも屈せず、『ルステラ、イコニオム、アンテオケの町々に帰って行き、弟子たちを力づけ、信仰を持ちつづけるようにと奨励し』た。」（患難から栄光へ上巻 199）

b. 使徒たちが働いた方法から、わたしたちは何を学ぶことができますか（使徒行伝 14:23-28）。

「たとえ信者数が少ない場合でも、教会組織が行われた。クリスチャンは、こうして、『ふたりまたは三人が、わたしの名によって集まっている所には、わたしもその中にいるのである』という約束を覚えて、互いに助け合うように教えられた。（マタイ 18:20）

パウロは、こうして設立された教会を忘れなかった。これらの教会を案じる気持ちは、いよいよつもの重荷として心に残っていた。たとえ小さな組織であっても、教会はやはり、たえずパウロの気づかいの対象であった。彼は小さい教会の信徒が完全に真理に立つことができるよう、特別に面倒を見る必要のあることを知っていて、教会をやさしく見守り、彼らの周囲にいる人々のために熱心に無私の努力を払うよう教えた。」（同上 201）

個人的な復習問題

1. なぜこの足のなえた人は、歩くことができるようになったのですか。
2. ルステラの人々が自分たちを拝そうとしたとき、弟子たちはどのように反応しましたか。
3. ルステラにおける神の働きをやめさせようとして用いた敵の戦術を述べなさい。
4. パウロがルステラで自分の試練を対処した方法から、なぜわたしは励まされることができるのですか。
5. 神がご覧になる小さい諸教会の価値を説明しなさい。

教理を明らかにする

暗唱聖句：「さて兄弟たちよ。わたしたちの主イエス・キリストの名によって、あなたがたに勧める。みな語ることを一つにして、お互の間に分争がないようにし、同じ心、同じ思いになって、強く結び合っていてほしい。」（コリント第一の手紙 1:10）

「兄弟たちは互いに尊敬し合い、共に助言し、彼らの間に一致が生じるまで共に祈るべきである。」（レビュー・アンド・ヘラルド 1885 年 12 月 15 日）

推奨文献： 患難から栄光へ上巻 203-212 下巻 113-133
牧師への証 426-443

日曜日

7月4日

1. 異なった考え

- a. ユダヤからのある人たちがクリスチャンの間でどのような考えを促進しましたか。そして、なぜこれが不和を引き起こしたのですか（使徒行伝 15:1; テトス 1:10, 11）。

「パウロの時代、相変わらず割礼にこだわっている人々がいて、彼らはそれがユダヤ人の義務であることを示すために聖書から多くの証拠を引き出すことができた。だがこの教えは、この時にはもはや何の重要性もなかった。なぜなら、キリストがカルバリーの十字架上で死なれたので、肉の割礼にはもはや何の価値も持ちえなかったからである。

それと関連していた型としての奉仕と儀式は十字架で廃止されていた。大いなる実体である神の小羊が罪ある人類のための供え物となられ、影が本体にあって終わった。パウロは、人々の思いを当時のための偉大な真理に向けようとした。しかし、イエスに従う者であると主張するこれらの人々は、ユダヤ人の伝統と割礼の義務にすっかり熱中していた。」（SDA バイブル・コメント [E・G・ホワイト・コメント] 6 巻 1061）

「これらユダヤ主義の教師たちは、救われるためには割礼を受けて、礼典律を完全に守らなければならないと、大きな確信をもって主張した。」（患難から栄光へ上巻 203, 204）

2. 理解を深める必要性

- a. 割礼に関して、神の小羊として来られるキリストの初臨を指し示していた礼典律と調和していることを確認するために、何が必要でしたか（コリント第一 1:10; 使徒行伝 15:2）。
- b. アンテオケからの弟子たちは、どのような知らせを伝えることができましたか（使徒行伝 15:3, 4）。

「エルサレムに到着するとアンテオケから来た代表者たちは、諸教会の集会の前で、彼らと共にいた伝道使節に伴った成功と、また改宗したパリサイ派のある者たちが、改宗した異邦人たちは救われるために割礼を受け、モーセの律法を守らなければならないと宣言した事実から混乱が生じたことを語った。」（パウロの生涯からのスケッチ 64）

- c. 異邦人の改心において成就した預言の最新情報を聞いた後でさえ、信じるパリサイ人のある者たちは、なお何を主張しましたか。それはなぜでしたか（使徒行伝 15:5）。

「ユダヤ人の改宗者はたいてい、神の摂理によって道が開かれても、すぐに進んでいこうとしなかった。使徒たちが異邦人のあいだで働いたために、ユダヤ人の改宗者よりも異邦人の改宗者の数のほうがはるかに多かったことは確かである。もしユダヤ人の律法が命じる禁止事項や儀式を、教会員になる条件として異邦人に行わせることをしないでいると、これまでユダヤ人を他の国民と区別してきた国民的特異性が、ついには福音を信じた人びとのあいだから失われるのではないかと、ユダヤ人は恐れた。」（患難から栄光へ上巻 204）

「ユダヤ人は神に定められた礼拝に誇りをもっていた。そして彼らは神が一度ヘブルの礼拝様式を定められたのであるから、神が何かその詳細の変更を承認なさることはありえないと結論づけた。彼らはキリスト教自体がユダヤの律法や儀式に結びつかなければならないと決めていた。彼らはキリストの死によって廃されていたものの結末を見極め、また彼らのすべての犠牲的な捧げ物は、神の御子の死を象徴していたものにすぎず、そこで型とその本体が会い、神が定められたユダヤ宗教の儀式と犠牲を価値のないものとしたことを理解するのが遅かった。」（パウロの生涯からのスケッチ 64, 65）

3. 一致のために奮闘する

- a. クリスチャンの代表者たちは自分たちの意見の相違について何をしましたか？そして、なぜこれがわたしたちすべての者にとって重要なのでしょうか(ローマ 15:5, 6; 使徒行伝 15:6)。

「主は、ご自分のみ言葉の中に明確に間違えようのない指示をわたしたちに与えて下さり、それに対する従順によって、わたしたちは教会内で一致と調和を維持することができる。兄弟姉妹よ、あなたがたはこれらの靈感を受けた指示に注意をはらっているであろうか？あなたは聖書の読者であり、み言葉の実行者であろうか？あなたはご自分に従う者たちが一つになるようにとのキリストの祈りを成就するために奮闘しているであろうか。」(教会への証 5 巻 248)

- b. ペテロとバルナバ、またパウロはみな、異邦人の間で御霊の働きの証拠について何を証言することができましたか(使徒行伝 15:7-12)。

「旧約の中で救われた魂は皆、今日われわれがキリストによって救われるのと同じくまさにキリストによって救われたのである。」(SDA パイブル・コメント [E・G・ホワイト・メント] 6 巻 1061)

- c. ユダヤ人と異邦人の改心者たちの間に完全な調和をもたらすために、規則の課題を引き起こした一つの要素をあげなさい(ローマ 14:19-21)。

「異邦人たちは絞め殺された動物の肉を常食していた。一方ユダヤ人たちは神によって彼らの用いるべき食物に関して指示を受けてきていた。彼らは獣を殺すのに独特で、血は体から流しださなければならなかった。さもなければ健康的な食物とみなされないものであった。神はこれらの禁止命令を彼らの健康と体力を維持する目的で与えてこられた。ユダヤ人は食品として血を用いることは罪だとみなしていた。彼らは血は命であると、また血を流すことは、罪の結果であると考えていた。

一方異邦人は反対に、犠牲の動物から流れる血を受けて、それを飲み、もしくは自分たちの食物の準備に用いるのが習慣だった。ユダヤ人は彼らが非常に長く守ってきた、また彼らが神の特別な指示の下で採用してきた習慣を変えることはできなかった。そこで、そのままではユダヤ人と異邦人が同じ食卓に来ると、前者は後者の習慣と様式に衝撃を受け、激怒することになるのであった。」(パウロの生涯からのスケッチ 65, 66)

4. 合意に到達する

- a. 食物としての血についての考え方の他に、他のどの異邦人の習慣が、ユダヤ人の改心者たちにもっともな懸念事項を引き起こしましたか（コリント第一の手紙 8:9-13; 6:18）。

「改宗した異邦人の多くは、無学で迷信的な人々の中に住んでいた。そのような人々は、絶えず偶像にいけにえやささげ物をささげていた。この異教の礼拝をする祭司たちは、彼らのもとに携えられてきたささげ物で、手広い商売を行っていた。それでユダヤ人たちは、異邦人の改宗者たちが、偶像にささげられたものを買ひ、そのために偶像崇拜的な習慣をいくぶんかは認することになり、キリスト教の評判をそこねるのではないかと心配した。……

異邦人、特にギリシヤ人は非常に放縦で、ある者は、心の中では改心せず、悪い習慣を捨てずに信仰を告白するおそれがあった。ユダヤ人のクリスチャンは、異教徒には犯罪とはみなされていないような行為を不道德と考え、寛大に扱うことができなかった。」（患難から栄光へ上巻 206, 207）

「私たちは放縦な時代に生存している。人々は罪を犯すことに大胆である。わが青年たちを、きよく守り、しっかりした原則で固め、その交友をえらび、心のかてとなる書物をえらぶことにもっと注意を払わなければ、彼らは、ソドムの住民と同じように道德の腐敗した社会に身をさらさなければならない。」（青年への使命 76）

「すべて不品行な者は神の都の外に出される。」（牧師への証 431）

- b. ヤコブはどのような公平な決断を勧告しましたか（使徒行伝 15:13, 19, 20）。

「この場合、ヤコブは会議によって持ち込まれた問題を決定するために選ばれていたようである。礼典律、特に割礼の儀式を異邦人にどんなことがあっても強要すべきではなく、勧めるべきでさえないと宣言したのは彼であった。ヤコブは自分の兄弟たちに、異邦人が偶像礼拝から神に向き直ることによって、彼らの信仰に大きな変更をなしたということ、また彼らがキリストに従うことにおいて失望することがないように、当惑させたり疑わしい質問で彼らの思いを悩ませることがないように大いに注意を払うべきであるという事実を印象づけようとした。

しかしながら、異邦人は、ユダヤ人の兄弟たちの見解と実質的に矛盾するような進路をとってはならなかった。……彼らは戒めを守り、清い生活を送ることを要求された。」（パウロの生涯からのスケッチ 69）

5. 現代の真理における一致

- a. クリスマン信者の代表者たちによって、どのような決議が承認されましたか（使徒行伝 15:22, 23, 28-31）。
- b. キリストの犠牲のうちにすでに成就された礼典律に関して最終的な決定にまだ不満を持っている人がいることを見て、わたしたちは何を悟るべきですか（ガラテヤ 6:12-15; 5:6）。

「この問題に関する採決のために、クリスマン全員が召集されたのではない。影響力と判断力のある『使徒たちや長老たち』が通達を書き、発行した。そして、それはキリスト教会に広く受け入れられたのである。しかし、すべての者がこの決定に満足したわけではない。この決定に反対した野心的で、自信の強い兄弟たちの党派があった。これらの人々は、独断でみわざに携わっているという態度をとり、しきりに激しくつぶやき、あらを探し、新しい計画を持ち出して、福音使命を伝えるよう神から任命されていた人々の働きをくずそうとした。教会は最初からそのような障害に会ってきたのであるが、これは、今後も常に、終わりの時まで続くであろう。」（患難から栄光へ上巻 211, 212）

「モーセを通して神によって与えられた礼典律は、その犠牲と儀式とあわせて、世の罪を取り除く神の小羊としてのキリストの死において型が実体に出会うまでヘブル人の上に拘束力をもつものであった。その後、すべての犠牲の捧げ物と礼拝は廃止されるのであった。」（ビュー・アソド・ヘアルド 1881 年 9 月 27 日）

「これらの〔礼典律の〕儀式を継続することはエホバに対する侮辱であった。」（SDA バイブル・コメンタリ [E・G・ホワイト・コメント] 5 巻 1140）

個人的な復習問題

1. 初期のクリスマンのある者たちは、どの不必要なくびきをすべての者に要求しようとしたか。
2. どのような方法において、わたしはパリサイ的な態度を育む危険のうちにいるかもしれませんか。
3. 使徒たちと長老たちが集まって話し合いをすることは、なぜ役立ったのですか。
4. 今日、不品行は蔓延していますが、教会はそれについて何と言わなければなりませんか。
5. なぜわたしは今日反対者が存在することに驚くべきではないのですか。

聖霊によって導かれる

暗唱聖句:「ここで夜、パウロは一つの幻を見た。ひとりのマケドニア人が立って、『マケドニアに渡ってきて、わたしたちを助けて下さい』と、彼に懇願するのであった。」(使徒行伝 16:9)

「マケドニアの叫びはあらゆる方向からわたしたちに訪れる。」(教会への証 5 卷 86)

推奨文献: 患難から栄光へ上巻 216-229
教会への証 9 卷 43-48

日曜日

7月11日

1. 強化させる同情

- a. 代表派遣の後、パウロとバルナバは何をしましたか。そしてなぜ彼らは別れたのですか(使徒行伝 15:35-39)。バルナバがヨハネ・マルコを信頼したことが、彼をどのように助けたかということから、わたしたちは何を学ぶことができますか(テモテ第二 4:11)。

「[パウロ] は、家庭生活の安全と楽しみのために働きを放棄するようなマルコの弱さを、ゆるす気になれなかった。そんなに耐久力のない者は、忍耐、克己、勇気、献身、信仰、心からの犠牲、いや必要ならば生命さえも要求する働きには向かないと、パウロは主張した。」(患難から栄光へ上巻 217)

「パウロとバルナバの激論、預言者や使徒たちの失敗や弱さが、みな聖霊によってあらわにされている。このお方は人の心から幕を引き上げられる。わたしたちの前には、信徒たちの生活が、彼らのすべての欠点や愚かさと共におかれていて、彼らに続くすべての世代にとっての教訓となるよう意図されている。もし彼らに弱点がなければ、彼らは人間を超えたものであり、わたしたちの罪深い性質は、あのような卓越した地点に到達することに絶望することであろう。しかし、彼らがどこで苦闘し倒れたのか、彼らがどこで再び元気づけられ、神の恵みを通して勝利したのかを知ることによってわたしたちは励まされ、墮落した性質がわたしたちの道においた障害物を乗り越えるようにと導くのである。」(教会への証 4 卷 12)

2. パウロとテモテ

- a. パウロは次にどこへ行きましたか。そして以前ルステラにおいてだれがパウロの信仰に鼓舞されましたか（使徒行伝 15:40, 41; 16:1, 2）。

「ルステラで悔い改めて、パウロの苦難を目撃した人々の中に、ひとり、のちにキリストのためにすぐれた働き人となった者がいた。それはテモテという名の青年だった。パウロが町からひきずり出されたとき、この年若い弟子は、見たところ生命のとだえたようなパウロのからだのそばに立って、傷ついて血まみれのパウロが、キリストのために苦難を受けることを許されたといつて、さんびを口にしながら起きあがるのを見た人々のひとりだった。」（患難から栄光へ上巻 198, 199）

- b. パウロには、どのような計画がありましたか。そしてその結果は何でしたか（使徒行伝 16:3-5）。

「テモテが幼年期を過ぎると、パウロは自分の働きの同伴者として彼を連れて行った。子供時代にテモテを教えた人々は、育てた息子が偉大な使徒と親密な友情で結ばれているのを見て、報われた。

テモテが神を愛したので、パウロはテモテを愛した。彼の体験的敬虔と真理の知識は、彼に卓越さと感化力を与えた。彼の家庭生活の敬神と感化力は安っぽいものではなく、純潔で分別があり、誤った意見に腐敗させられていなかった。彼の家庭の道徳的感化力は堅実なものであり、発作的でも衝動的でも変わるものでもなかった。神のみ言葉が彼を導いた規則であつた。……彼の家庭の指導者たちは、若年期におとずれることになっていた重荷を負うためにこの青年を教育することにおいて、神と協力した。」（SDA パイブル・コメンタリ [E・G・ホワイト・コメント] 7 巻 918）

「キリストの恵みによって、使徒たちはあのような者にされたのであつた。彼らをこのお方との緊密な交わりのうちに入れたのは、まじめな献身とへりくだった真剣な祈りであつた。彼らは天国でこのお方と共に座した。彼らはこのお方に対する自分たちの負債の大きさを自覚した。真剣な辛抱強い祈りによって、彼らは聖霊の賜物を得て、それから魂を救うという重責を負いながら、十字架の勝利を広めるための熱意に満たされて出て行つた。」（教会への証 7 巻 32）

3. 叫びに耳を傾ける

- a. 聖霊がどのように使徒たちを絶えず導いたかを見て、すべての信者は、何をまじめに祈りをもって考えるべきですか（使徒行伝 16:6-10）。

「わたしたちは最も厳粛な時代に生存している。重要な責任がわたしたちに負わされている。新しい畑がわたしたちの働きの前に開かれており、マケドニヤの叫びが至る方向から届いている、『来て、わたしたちを助けて下さい』。ある人々はもしそれ以上できないなら、一日でも良いから彼らと共に働いて欲しいと懇願する。神の御使たちが聞くための耳と、警告のメッセージを受けるための心を準備している。そして、わたしたちのただ中に、わたしたちの信仰の理由を一度も聞いたことがない正直な魂が生存している。民は知識がないために滅びつつある。第三天使のメッセージを世に伝えるためになすことができる百分の一もなされていない。真理を一度も聞いたことがない魂のために責任を与えられる人々がいる。」（ビュー・アンド・ヘラド 1914 年 10 月 22 日）

「あなたがた自身の扉の近くに、また外国の地にも畑があり、収穫のために実っている。主は今、ボランティアを募っておられる。神の働き人たちよ、出て行きなさい。涙をもって、尊い種をたずさえて。なぜなら、疑いの余地なく、あなたは喜びをもって、あなたの束を携えて戻ってくるからである。あなたの祈りと涙が、あなたの働きに伴わなければならない。こうしてあなた自身の品性のきよくない特質が、神の聖なるみ働きを損なうことがないためである。あなたの最善の努力を通してでさえも、あなたのできることに頼るのを減らし、神の御名の栄光のためになされるすべての努力において、神があなたのためになすことがおできになることにもっと頼りなさい。」（同上 1885 年 12 月 15 日）

「マケドニヤの叫びは四方から届いている。人は『自分たちが働くことが許されるかどうかを見るために『通常の分野』に行くだろうか、あるいは出て行って、自分自身の能力と主の助けを頼みに、つましい方法から始め、警告のメッセージを与えるために何もしてこなかった場所に関心を生み出しつつ、自分たちの最善をなすであろうか。』

主は自分自身の責任で、ご自分のために働きを始めた人々を励ましてこられた。彼らの心は滅びるばかりの魂に対する愛で満たされている。真の伝道者の精神が、神と神がつかわされたイエス・キリストを知ろうと熱心に努める人々に分け与えられる。主は生きて、統治しておられる。青年方よ、主の御霊によって命じられる場所へと出て行きなさい。あなたの手ずから働きなさい。こうしてあなたが自給できるためである。そして機会のある時に警告のメッセージを宣布しなさい。」（医事伝道 321）

4. マケドニアにおける魂の勝利

- a. マケドニアにおいて使徒たちの主な焦点はどこにありましたか（使徒行伝 16:11, 12）。
- b. この地域に最初の改心者たちがどのようにしてもたらされたかを述べなさい。またわたしたちはこのことから何を学ぶことができますか（使徒行伝 16:13-15; 詩篇 25:9）。

「真の柔和は心を和らげ征服し、心を植え付けられた言葉にふさわしいものとする。それは思いをイエス・キリストへの従順へ導く。それはルデヤの心が開かれたように、心を神のみ言葉に対して開かせる。」（清められた生涯 14）

「ルデヤは真理をよるこんで受け入れた。彼女もその家族も改心してバプテスマを受け、また、彼女の家泊まるようにと彼女は使徒たちに懇望した。」（患難から栄光へ上巻 228）

- c. 人が真実なことを述べていながら、あらゆる真理の創始者であられるお方の感化力を損なっている状況を説明しなさい（使徒行伝 16:16, 17）。

「この女はサタンの特別な手先で、占いをして彼女の主人たちに多くの利益を得させていた。彼女の感化により偶像礼拝が盛んになっていた。サタンは自分の王国が侵略されていることを知って、神のみわざに反対するのにこうした手段を用い、福音使命を宣べ伝えている人々の教える真理に彼の詭弁を混ぜようと望んだ。この女が語る推薦の言葉は、人々の心を使徒たちの教えからそらし、福音の評判を傷つけるので、真理のみわざにとっては有害であった。その言葉によって多くの者は、み霊と神の力によって語っている人々が、このサタンの使者と同じ霊によって動かされていると信じさせられたのである。」（患難から栄光へ上巻 228）

- d. パウロは彼女のために何をすることを余儀なくされましたか（使徒行伝 16:18）。

「女は悪霊から解放され、正常な心をとりもどすと、キリストに従う者となることを望んだ。」（同上 229）

5. キリストと共に苦しむ

- a. 占いの女が奇跡的にサタンから解放されたとき、敵はどのようにしてパウロとシラスに対してその怒りを向けましたか（使徒行伝 16:19-22）。

「〔女の主人たち〕は、彼女の占いや予言から金銭を受けるすべての望みが終わったことを知り、もし使徒たちがその働きを続けることを許されれば、自分自身の収入源がまもなく完全に断たれるようになることがわかった。」（パウロの生涯からのスケッチ 74）

「この町にはその他大勢が、サタンの惑わしを通して金銭をかせぐことに関心を持っていた。そしてこれらの人々は、これほど効果的に自分たちの仕事をやめさせる力の感化力を恐れて、神の僕たちに反対して力強い叫びをあげた。……

熱狂的な興奮をかきたてられ、群衆は、いつせいに弟子たちに反対して立ち上がった。暴徒の精神が蔓延し、当局によってそれが認可された。」（同上 229）

- b. 使徒たちに強いられた信じがたい残酷さと、彼らの反応を説明しなさい（使徒行伝 16:23-25）。

「使徒たちは非常に痛みを伴う状態にしておかれた。彼らの引き裂かれ、血を流している背中が、荒い石の床に当たり、彼らの足はあげられて、柄（え）にしっかりと結びつけられた。この不自然な姿勢で彼らは非常な拷問に苦しんだ。しかし、彼らはうめいたり、不平を言ったりしなかった。かえって互いに会話し、励ましあい、そしてこのお方の愛するみ名のゆえに恥辱をこうむるに足るものと見られたことに感謝の心をもって、神を賛美した。」（パウロの生涯からのスケッチ 75）

個人的な復習問題

1. だれについて、わたしはマルコに対するバルナバのように、支援できるかもしれませんか。
2. テモテのためになされたように、どのようにわたしは、重荷を負う準備をだれかにさせることができますか。
3. 今日のマケドニヤの叫びにこたえて、わたしはどのように行動をとることができますか。
4. ルデヤのように、どこで真理に心を開いている柔和な魂を見出すかもしれませんか。
5. パウロとシラスのつらい経験が、どのように今日わたしのために助けとなりますか。

地下牢での栄光

暗唱聖句：「わが敵よ、わたしについて喜ぶな。たといわたしが倒れるとも起きあがる。たといわたしが暗やみの中にすわるとも、主はわが光となられる。」(ミカ書 7:8)

「キリストは〔ピリピの地下牢の中でパウロとシラス〕のそばにおられ、主のご臨在の光は天の宮の栄光をもって暗やみを照らした。」(祝福の山 44)

推奨文献： 患難から栄光へ上巻 230-236

日曜日

7月18日

1. 愛によって心を喜ばせて下さる

a. キリストがわたしたちの心の中におられるとき、もしわたしたちが真理のために牢獄に入れられるなら、何が起こりますか (ミカ 7:8)。

「われわれの敵はわれわれを牢獄に入れるかもしれないが、牢獄の壁はキリストとわれわれの交わりを遮断することはできない。自分たちのすべての弱さを見、そのすべての試練を知っているすべての者は、誰よりも地の力である。天使たちはわれわれの孤独な独房にやってきて、天からの光と平和をもたらせる。その獄は信仰に富んだ者がいるので宮殿のようになる。そして暗い壁は天の光で照らされるであろう。」(福音宣伝者 424)

「神の栄光が獄の壁を突き抜け、最も暗い牢獄に天の栄光に満ちた光線があふれる。このお方の聖徒は苦しむかもしれない、しかし彼らの苦しみは、昔の使徒たちのように、その信仰を広め、キリストに魂を勝ち取り、このお方の聖なる名に栄光を帰すのである。」(上を仰いで 315)

「主のために牢獄に横たわり、あるいはさびしい島に追放されている忠実なしもべたちのことを、主は全部知っておられる。主は自らそこにいて彼らを慰められる。真理のために信者が不正な裁判の座に立つとき、キリストは彼のかたわらに立っておられる。彼の上に浴びせられるすべての非難はキリストの上に落ちかかるのである。キリストがその弟子の身代りとなってふたたび有罪の宣告を受けられるのである。人が牢獄の壁の中に閉じこめられるとき、キリストはご自分の愛をもって心をよろこばせてくださる。」(各時代の希望下巻 153, 154)

2. わたしたちのための教訓

- a. ピリピの地下牢でのパウロとシラスの態度を考えると、わたしたちはつねに何を心にとめておくべきですか（ピリピ 2:14, 15）。

「真つ暗闇のみじめな獄屋の中で、〔パウロとシラス〕は祈りの言葉で互いに励まし合い、自分たちが神のためにはずかしめを受けるにふさわしいものとされたことを知って、神をさんびして歌った。彼らの心は、あがない主のみわざに対する深い、真実な愛によって元気づけられた。パウロは自分が手をかけてキリストの弟子たちを迫害に追いやったことを思い、かつては軽蔑していた輝かしい真理の力を見る目が開かれ、それを感じる心が開かれたことをよろこんだ。

ほかの囚人たちは、奥の獄屋から祈りと歌が聞こえてくるのを、驚きながら聞いていた。彼らは、夜のしじまを破って聞こえてくる悲鳴やうめき、のろいや悪口には慣れてしたが、陰気な地下室から祈りやさんびの言葉が上ってくるのをこれまで聞いたことがなかった。獄吏も囚人たちも驚き、寒さと飢えと責め苦にあいながら、なおよろこぶことのできるこの人たちはだれだろうかと、互いに語り合った。」（患難から栄光へ上巻 229, 230）

「パウロとシラスはすべてのものを失う苦しみにあつた。彼らはむち打たれ、最も苦しい姿勢で地下牢の冷たい床に、荒々しく投げ込まれ、彼らの足はあげられて、柄にしっかりと結ばれた。そのとき、不平や文句が獄吏の耳に届いたであろうか。ああ、まったく違った！牢獄の中から、喜びと神への賛美の歌声が真夜中の沈黙を破った。これらの弟子たちは自分たちの贖い主のみ事業のために苦しんだが、そのみ事業をおもう深く熱心な愛によって活気づけられた。

神の真理がわたしたちの心を満たし、わたしたちの愛情をのみこみ、わたしたちの生活を支配するとき、真理のために苦しむことを喜びとみなす。どの牢獄の壁も、どの殉教者の火刑柱も、わたしたちを大いなるみ働きにおいてひるませたり、妨げたりすることはできない。わが魂よ、カルバリーに來たれ。神の御子のいやしい生活に注目せよ。この方は悲しみの人で、病を知っておられた。このお方の恥辱、ゲッセマネにおける苦悩を見よ。そして自己否定が何であるかを学べ。わたしたちが欠乏に苦しんでいるであろうか。天の大君、キリストもそうであつた。しかし、このお方の貧しさはわたしたちのためであつた。わたしたちは富める者の中にいるであろうか。このお方もそうであつた。しかし、このお方はわたしたちのために貧しくなることに同意された。それは、わたしたちがこのお方の貧しさを通して富む者となることができるためであつた。キリストのうちに、わたしたちには例証された自己否定がある。…わたしたちは、もし目覚めているならできるはずのことを 20 分の 1 もしていない。」（教会への証 3 巻 406, 407）

3. 全能者の介入

- a. 全能者が夜中に地下牢から上がる祈りと讃美をお聞きになったとき、このお方は何をなさいましたか。そしてこれは地上の最後の時代における忠実な魂をどのように引き上げることができますか（使徒行伝 16:26; 詩篇 103:13, 17-22）。

「パウロとシラスは神に祈り讃美した。そして天使たちが天から彼らを解放するために送られた。地はこれらの天来の使者たちの足音に震え、そして牢獄の戸は勢いよく開き、囚人たちを自由にした。」（今日のわたしの生涯 20）

「キリスト教国のさまざまな為政者たちが、戒めを守る者たちを抑圧するために出した法令によって、政府の保護が取り除かれ、彼らが彼らの滅亡を願う者たちの手にまかされると、神の民は都市や村から逃れ、……しかし、あらゆる国のあらゆる階級の人々が、身分の高い者も低い者も、富んだ者も貧しい者も、黒人も白人も、大ぜいの者が最も不当で残酷なとらわれの身に突き落とされる。神に愛されている者たちが、疲れきった日々を送り、鎖につながれ、牢獄の格子の中に閉じ込められ、死刑の宣告を受ける。ある者は暗くいまわしい土牢の中で、餓死するままだに放置されているように見える。彼らのうめきを聞く人間の耳はなく、彼らを助けようとする人間の手はない。

この試みの時に、主はご自分の民をお忘れになるだろうか。主は、洪水前の世界に刑罰がくだった時、忠実なノアをお忘れになっただろうか。平地の町を焼き尽くすために火が天からくだった時、ロトをお忘れになっただろうか。エジプトで偶像礼拝者たちに囲まれていたヨセフをお忘れになっただろうか。イゼベルがエリヤをバアルの預言者と同じ運命にすると誓って彼を脅かした時、主はエリヤをお忘れになっただろうか。牢獄の暗く陰うつな穴にあったエレミヤをお忘れになっただろうか。火の炉の中の三人の人物を、あるいはライオン穴の中のダニエルを、お忘れになっただろうか。

万軍の主は言われた『あなたがたにさわる者は、彼の目の玉にさわるのである』（ゼカリヤ書 2:8）。

敵が彼らを牢獄に投げ入れても、土牢の壁は彼らの魂とキリストとの交わりを断ち切ることはできない。彼らのあらゆる弱さを見、あらゆる試みを知っておられるおかたは、地上のすべての権力にまさっておられる。そして天使は寂しい独房に彼らを訪れ、天よりの光と平安を伝える。牢獄は宮殿ようになる。それは信仰に富む者がそこに住んでいて、パウロとシラスがピリピの獄屋の中で真夜中に祈りをささげ讃美の歌声をあげたときのように、陰うつな壁が天の光で照らされるからである。

神の民を抑圧し滅ぼそうとはかる者たちの上に、神の刑罰が下る。」（各時代の
大争闘下巻 400-402）

4. 神の奇跡によって触れられる

- a. 地震によって囚人が逃げられるようになったのを見たとき、獄吏はどのように反応しましたか。そしてパウロはどのようにキリストのための力強い証人であることをあらわしましたか（使徒行伝 16:27-30）。

「〔獄吏〕は、自分の不忠実の外観の刑罰は死に違いないと思った。彼は精神の苦悩のうちに、不名誉な死刑執行に服するよりは、自分自身の手で死ぬほうが良いと叫んだ。彼が死のうとしたとき、パウロは大声で叫んだ。『自害してはいけない。われわれは皆ひとり残らず、ここにいる』。

獄吏が使徒たちを扱った過酷さは、彼らの怒りを引き起こしてはおらず、彼が自害するのを許すこともしなかった。かえって彼らの心はキリストの愛に満たされていたので、彼らの迫害者たちに対して悪意を抱いてはいなかった。獄吏は自分の剣を手から離して、光を求めた。彼は地下牢の中へ急ぎ、そしてパウロとシラスの前にひれ伏して、彼らの許しを請った。彼はそれから、彼らを公開法廷へ連れ出し、彼らに尋ねた。『先生がた、わたしは救われるために、何をすべきでしょうか』

地震のうちに表された神の怒りのゆえに、彼は震えていた。彼は、囚人たちが逃げたと思ったとき、ローマの法律の刑罰を恐れて自害しようとしていた。しかし今やすべてこれらのことは、今自分の思いをかき乱す新しい奇妙な恐怖、また使徒たちがあのような極限の苦しみと虐待の下であらわした平安と快活さを持ちたいという願いに比べたら、彼にとって大した問題ではなかった。…

彼は弟子たちの状態と比べて自分自身の嘆かわしい状態を見た。そして、深い謙遜と敬神をもって彼らにいのちの道を示してほしいと頼んだ。」（パウロの生涯からのスケッチ 77, 78）

- b. この危機の中で聖霊がどのように心を動かされたかを説明しなさい（使徒行伝 16:31-36）。

「心を清める感化力は獄屋の囚人たちにも広まり、すべての者が心を開き、使徒たちの語る真理に聞き入った。ふたりが仕える神が、ふたりを奇跡的に束縛から解き放されたことを彼らは認めた。」（患難から栄光へ上巻 234）

5. 価値ある苦しみ

- a. 長官たちはパウロとシラスがローマ市民であることを知ったとき、彼らは何をしましたか、そして使徒たちはどのように応じましたか（使徒行伝 16:37-39）。

「長官たちは市民に及ぼす使徒たちの影響力をおそれ、更に、これら罪のない人々のために干渉された神の力をおそれたのである。キリストから与えられる指示に従って行動していた彼らは、望まれていない場所に居つづけようとは思わなかった。」（患難から栄光へ上巻 234, 235）

- b. パウロとシラスが残酷な試練に直面した後、一大変興味深いことに一出発する前に、だれが、だれを慰めましたか（使徒行伝 16:40）。使徒たちはピリピでの彼らの時間について、なんと結論づけましたか（ピリピ 1:29）。

「使徒たちはピリピでの働きがむだだったとは思わなかった。彼らは大いに反対と迫害に会ったが、獄吏とその家族の改心は、彼らが耐えた恥辱と苦痛をあがなう以上のものであった。ふたりが不正に投獄されて、奇跡的に救出されたことは、その地方一帯に知らされて、これがなかったら決して接することがなかったほどの多くの人々が、使徒たちの働きを知るようになった。」

ピリピにおけるパウロの伝道により、教会が設立されるようになり、教会員が着実に増加していった。パウロの熱意と献身、それに何よりも、キリストのためによりこんで苦しむその姿勢は、改宗者に深くゆるぎない感化を及ぼした。使徒たちが多くの犠牲を払っている尊い真理を、彼らは称賛し、あがない主のために彼らも心から献身した。」（同上 235）

個人的な復習問題

1. もしわたしが真理のために投獄されるなら、何がわたしの優先事項となるべきですか。
2. キリストとその使徒たちの苦しみは、どのようにわたしを動機づけるべきですか。
3. ピリピにおける地震は、わたしが仕える神について何を教えますか。
4. 残酷な獄吏がどのように変えられたかを述べなさい。
5. マケドニアへ行くようパウロに言われた神の召しから、どのような実が生じましたか。

思いと心へ訴える

暗唱聖句：「神は、このような無知の時代を、これまでは見過ごしにされていたが、今はどこにおる人でも、みな悔い改めなければならないことを命じておられる。」（使徒行伝 17:30）

「公の集会が一時中断されたからと言ってわたしたちの努力をやめてはならない。関心を持つ人がいる限り、わたしたちは彼らに真理を学ぶ機会を与えなければならない。」（伝道 337）

推奨文献： 患難から栄光へ上巻 241-261

日曜日

7月25日

1. 三つの安息日にわたり論じる

a. ピリピの後、パウロとシラスの次の使命を述べなさい（使徒行伝 17:1-3）。

「ピリピを後にしてから、パウロとシラスはテサロニケへ向かった。彼らはそこで会堂で大勢の人々に語る特権が与えられ、良い結果を得た。彼らの外観は最近受けた恥辱的な取り扱いの証拠をおびており、彼らが何に耐えなければならなかったかを説明する必要があった。彼らは自らを高めることなく、かえって彼らを救出してくださった神の恵みを大いなるものとして説明した。しかしながら、使徒たちは自分自身の苦難について長々と語る時間はないと感じた。彼らはキリストのメッセージを伝える責任を負い、このお方の働きに非常に熱心であった。

パウロはメシヤに関して述べている旧約の預言とキリストの生涯と教えがこれらの預言と一致していることを、自分の聴衆の中で、主題の証拠を受け入れようとするすべての人の思いにはつきりさせた。」（パウロの生涯からのスケッチ 81, 82）

「パウロはアドベンチストであった。彼は、キリストの再臨の重要な出来事を、非常な力と議論をもって提示し、テサロニケの人々の思いに決して拭い去ることのできない深い印象を残した。」（同上 83）

2. 扇動

a. テサロニケでメッセージはどのように受け入れられましたか (使徒行伝 17:4)。

「福音の真理がテサロニケで力強く宣べ伝えられたため、大会衆の注意を引いた。」(患難から栄光へ上巻 246)

b. 魂の敵が自分の嫉妬深い怒りを表した方法を述べなさい。また今日わたしたちは、この経験から何を学ぶことができますか (使徒行伝 17:5-8)。

「妬み深いユダヤ人たち」は、価値のない暴徒の激情を狡猾に仕組まれた偽りで興奮させ、一時的な使徒たちの家であったヤソンの家を騒々しく攻撃するよう彼らをおりたてた。彼らは人というよりは獣のような激しい怒りをもってこうしたのであった。彼らはユダヤ人によって、パウロとシラスを引き出し、彼らを当局へ引いていき、すべてこの騒ぎを生じさせ暴動を起こした罪で告発するように指示されていた。

しかしながら、彼らが家を破って入ったとき、使徒たちがそこにはいないことがわかった。何が起ころうとしているかを知った友人たちが、彼らを急いで市から出したのであった。…

わたしたちの時代に人気のない真理を宣布する人々は、使徒たちのように、断固とした抵抗に出会う。彼らはパウロがユダヤ人の兄弟から受けたよりも、クリスチャンだと公言する大多数から好ましく受け入れられることを期待するには及ばない。彼らに対して反対する要素の団結があるであろう。どれほど様々な組織が、互いに心情や宗教的な信仰に違いがあっても、彼らの力は、神の律法の第四条を足の下に踏みじめることにおいて結束するであろう。

自ら真理を受け入れない人々は、他の人がそれを受け入れないよう最も熱心である。そして辛抱よく偽りをつくりだし、神の真理を効果のないものにするために人々の低俗な情欲をかきたてるそれらの人々に不足はない。しかし、キリストの使者たちは見張りとし祈りで武具をまとい、信仰、堅固さ、勇気をもって前進し、イエスのみ名のうちに、使徒たちのように働き続けなければならない。彼らは世に警告の知らせを響かせ、律法の違反者たちに何が罪であるかを教え、彼らにその偉大にして唯一の治療であられるイエス・キリストを指し示さなければならない。」(パウロの生涯からのスケッチ 84-86)

3. 様々な思いに対処する

- a. ベレヤにどの祝福が見いだされましたか。そしてこれは、わたしたちにとってどのような教訓ですか (使徒行伝 17:10-12)。

「背教は起きてきた。そして主はこの性質の事態が過去に発達することを許してこられた。それはご自分の民が、はたしてその通りかどうかを知るために、高潔なベレヤの人々がしたように、自分で聖書を探る代わりに人の言葉に依存するとき、どれほどたやすく誤り導かれるかを示すためであった。」(セクレッド・メッセージ 2 巻 394)

「主がまもなく来られることを信じると主張する人はみな、かつてなかったほど聖書を調べなさい。なぜなら、サタンは魂を闇のうちに保ち、思いをわたしたちの生存している時代の危険性に対して盲目にするために可能な限りすべての手段を試すことを決心しているからである。すべての信徒は熱心な祈りをもって聖書をとりあげなさい。それは、何が真理であるかについて聖霊によって啓発されることができるよう、またもっと神と神がつかわされたイエス・キリストを知ることができるためである。真理を隠された宝のように探し、敵を失望させなさい。テストの時間が間近に迫っている。なぜなら、罪を許される贖い主キリストの義の啓示のうちに、第三天使の大いなる叫びはすでに始まっているからである。これは全地をその栄光で照らす天使の光の始まりである。なぜなら、イエスを掲げ、このお方を世に提示するのは、警告のメッセージがもたらされたすべての人の働きだからである。」(同上 1 巻 362, 363)

- b. パウロはどのような種類の場所に急いでいきましたか？そしてそれはなぜですか (使徒行伝 17:13-15)。

「アテネという都市は異教の首都であった。ここでパウロが出会ったのは、ルステラのような無知で軽々しく信じやすい民衆ではなく、知性と教養で知られている人々であった。ここではいたるところで彼らの神々の像や、歴史や詩に出てくる、神格化された英雄の像が目につき、また壮麗な建築物や絵画が、国家の誇りと、異教の神々への民衆の礼拝を表していた。人々の感覚は、芸術の美と華麗さに魅せられていた。どちらを向いても、費用を惜しまず建てられた寺院や神殿の巨大な姿がそびえていた。軍事上の勝利や有名な人の行為が、彫刻や神社や石碑によって記念されていた。これらすべてが、アテネを巨大な画廊にしていた。」(患難から栄光へ上巻 251, 252)

4. 知的ではあるが…欺かれている

a. パウロのアテネ文化の紹介を述べなさい (使徒行伝 17:16-21)。

「真の神が礼拝されていないこの大都市で、パウロは孤独感におそわれ、共労者の同情と助けを切望した。人間的な友情に関するかぎり、彼は自分が全くひとりであると感じた。パウロはテサロニケ人への手紙の中でこの感情を『わたしただだけがアテネに留まる』という言葉の中に表している (テサロニケ第一 3:1)。打ち勝ち難いと思われる障害が彼の前に立ちはだかつていて、人々の心に到達しようという試みはほとんど望みがないように思えた。

パウロは、シラスとテモテを待っているあいだ、何もせずに時間を過ごしたのではない。彼は『会堂ではユダヤ人や信心深い人たちと論じ、広場では毎日そこで出会った人々を相手に論じた』。しかしアテネでのパウロの主な仕事は、神について、また、堕落した人類のための神の目的について、知的な概念のない人々に、救いのおとずれを携えて行くことであつた。使徒パウロはまもなく、最も巧妙で、魅惑的な形態の異教思想に出会うのであつた。……

ある者たちは、社会的にも知的にも彼らよりはるかに劣っている者としてパウロをからかうつもりで……

パウロと接触するようになった人たちもみな、彼が自分たちよりもっと大きな知識の宝庫を持っていることがすぐにわかつた。パウロの知的能力は学問のある人たちの尊敬を集め、また彼の熱心で筋道だった議論と雄弁の能力は、すべての聴衆の注意を引いた。聴衆はパウロが未熟者ではなく、自分の教える教理を擁護し、説得力のある議論であらゆる階級の人々を迎えることができることを認めた。こうして使徒パウロは、恐れることなく立って、反対者たちに彼ら自身の土俵で応じ、論理には論理を、哲学には哲学を、雄弁には雄弁をもって対処した。」(患難から栄光へ上巻 252-254)

b. 環境を礼拝する人々には、今日、どの点が欠けていますか (使徒行伝 17:22-28)。

「[人] 自分で自然を解釈すると、必然的にそれを神の上においてしまう。彼らは自然の礼拝に献げた自分たちの祭壇の中に、『知られざる神に』書かれたものがあつた。神は実際、彼らに知られていなかった。このお方は、神聖な教師の導きなしに、自然の研究にとりかかるすべての人に知られていないのである。彼らは確かに誤った結論へたどり着くことになる。」(教会への証 8 巻 257)

5. 現実と焦点

- a. アテネの人々になされたどの訴えは、彼らよりもはるかに大きな光を委ねられ、調査審判の時に生きているわたしたちにとって、身の引き締まるような注意喚起ですか（使徒行伝 17:29-31）。

「だれでも、祝福された者の住居に入り得る前に、調査され、その品性と行為が、神の前で吟味されねばならない。すべての者は、天の書物に記されたことに従ってさばかれ、その行為に従って報いを受ける。この審判は、死ぬ時に行なわれるのではない。パウロの次の言葉に注意したい。『神は、義をもってこの世界をさばくためにその日を定め、お選びになったかたによってそれをなし遂げようとされている。すなわち、このかたを死人の中からよみがえらせ、その確証をすべての人に示されたのである』（使徒行伝 17:31）。使徒パウロは、ここで、ある一定の時—その当時—にあつては、まだ将来のことであつたが—が、この世の審判の時として定められていることを、はっきりと述べた。」（各時代の斗争闘下巻 300）

- b. アテネにおけるパウロの働きはどのように完了しましたか（使徒行伝 17:32-34）。

「自らの働きを終えるとき、彼〔パウロ〕はその働きの結果を見たいと思った。〔アテネにおける〕彼の雄弁な言葉を聞いていた大群衆の中から、改心して信仰を持ったのはたったの三人だけであつた。そこで彼はその時以来、福音の単純さを維持しようと決心した。彼は世の学問は人々の心を動かすには無力であるが、福音は救いに至らせる神の力であると確信した。」（SDA バイブル・コメンタリ [E・G・ホワイト・コメント] 6 巻 1062）

個人的な復習問題

1. ピリピでの苦しみの後、使徒たちの熱意から、わたしたちは何を学ぶことができますか。
2. テサロニケでのパウロの一般的な経験はまもなく、どのように繰り返されますか。
3. ベレヤで見られた態度が、どのように今日わたしたちの命にかかわりますか。
4. どのような方法において、今日の社会はアテネに存在していたものと類似していますか。
5. パウロがアテネにおいて学んだどの教訓を、わたしも学ぶ必要がありますか。

第一安息日献金 世界総会教育支部のために

今やかつてなかったほど、わたしたちの子どもたちの教育のために投資する必要があります。この世の事柄で攻めを受けているため、彼らを敵の策略から守ることはますます難しくなっています。かつてはアクセスが制限されていたものが、今や文字通り「スマート」フォンや他のデバイスを通して、わたしたちの子どもたちにつきまといまわっています。わたしたちは、自分自身の子どもたちがまだ伝道の働きのために準備ができていないときに、いかにしてその働きにふさわしくなることができるでしょうか。



「真の教育とは伝道者を養成することであって、神のむすこ、娘はすべて伝道者となるように召された者である。わたしたちは神と人々に奉仕するために召されている。そしてこの働きに適した者となることが、わたしたちの教育の真の目的でなければならない。」(ミズストリー・オブ・ヒーリング 364)

長年の間、教会は自分の子どもたちを教育するために簡単に手に入れられるカリキュラムを望んでいました。今、世界総会は、これを優先事項としています。わたしたちの教育者や世界中のユニットとパートナーを組み、このカリキュラムを着々と準備しています。

プロジェクトは甚大で、皆さんの惜しみない寄付が、次の三つのことを助けることができます。教材を準備すること、教材を翻訳すること、そしてそれらを貧しい場所にいる人々が手に入れられるようにすることです。

12 学年を通じた完全な初等カリキュラムが必要です。これには教科書と学習帳を準備するための時間、資金、そして十分な資格のある人材が必要です。皆さんの支援が最高の品質を持った教材を準備することを可能にします。こうして生徒たちはそれらを使って「この世の生涯における有用性と、永遠を通じて神の奉仕のためにふさわしくされる」(両親、教師、そして生徒への勧告 495) のです。

教材は世界中の教会を通じて採用できるように翻訳しやすく準備されています。皆さんの援助が、家庭でも教会学校でも用いられる教材を準備できるようにしてくれます。

ある場所では、この教材を手に入れるには、多くの人々の資金能力を超えています。皆さんの援助により、貧しい場所でも特権を奪われている地域社会に彼らの購入できる価格設定でこれらの教材を提供できるようになります。このプロジェクトが広大であることを理解していますが、その価値があります。皆さんの惜しみない献金により、算数から国語、社会科学までの教材をつくり、わたしたちのうちにいる最も若い者たちを世界中に福音のメッセージを伝えるために準備させるのです。先だってお礼申し上げます。神様が贈りものと贈り主を祝福して下さいように。

自給伝道活動

暗唱聖句：「なぜなら、わたしはイエス・キリスト、しかも十字架につけられたキリスト以外のことは、あなたがたの間では何も知るまいと、決心したからである。それは、あなたがたの信仰が人の知恵によらないで、神の力によるものとなるためであった。」（コリント人への第一 2:2, 5）

「もし義務の道において熱情の衰えることがあれば、彼は十字架を一目見るだけで、そこに驚くべき愛が示されていることを知り、自己否定の道に遭進するのであった。」（患難から栄光へ上巻 265）

推奨文献： 患難から栄光へ上巻 262-275, 293-295, 下巻 36-39

日曜日

8月1日

1. 模範としての注意深さ

- a. パウロがコリントに来るためにアテネを去ったとき、彼は生計を立てるためにどこに行きましたか。それはなぜでしたか（使徒行伝 18:1-3）。

「パウロがコリントにやって来たとき、彼はアクラから仕事を頼まれた。使徒と一緒に相談し、祈り、そして、知識がないために滅びつつある魂に対する私心のない愛のうちに、福音をあるべき方法で宣べ伝えようと決心した。パウロは天幕づくりの仕事をして、自分の同労仲間の手ずから働くことを教え、こうして、どんな緊急事態にあっても自給できるようにするのであった。……

パウロは高い教育を受けており、その才能と雄弁を賞賛されていた。彼は同国人からサンヒドロリンの一員として選ばれ、際立ったラビであった。しかしながら彼の教育は、だれか有益な手に職を持つ人の見習いを勤めないうちは完成されたとはみなされなかった。彼は自分が手仕事によって暮らしを支えることができることを喜び、自分自身の手が自分の必要のために力を貸したのだとしばしば断言した。見知らぬ人たちの間にいる間は、彼はだれにも負担をかけようとはしなかった。彼は財産をキリストの働きを進めるために使い果たした時は、生計を立てるために自分の職の力に頼った。」（SDA パイブル・コメント [E・G・ホワイト・コメント] 6 巻 1062, 1063）

2. コリントにて

- a. コリントにて伝えに出て行ったパウロの第一段階は何でしたか（使徒行伝 18:4）。彼の模範によってわたしたちはどのように鼓舞されることができますか（ルカ 14:23）。

「福音の働き人として、〔パウロ〕は自らを支える代わりに、自分の援助を主張できたことであろう。しかし、自分を支えるための資金を受け入れることが、自分の有用性の道をたちふさぐかもしれないと恐れて、この権利を彼は自分から捨てた。健康は弱かったにもかかわらず、彼は日中キリストのみ事業のために奉仕し、それから夜の大部分を、さらにしばしば徹夜で勞し、自分自身と他の人の必要のために備えたのであった。」（教会への証 4 巻 409, 410）

「自給伝道者は多くの場所で成功することができる。使徒パウロが全世界にキリストの知識を広めたのも自給伝道者としてであった。彼はアジアとヨーロッパの大きな都市に毎日福音をのべ伝えながら、自分と共労者をささえるため、職人として仕事をしていた。……

今日、多くの人がこれと同じ自己犠牲の精神にあふれているならば、同じように良い働きが可能である。ふたりかそれ以上で伝道の働きを始めなさい。人々を訪問し、祈り、賛美し、教え、聖書の説明をし、病人に奉仕なさい。ある者は文書伝道者として自らをささえ、その他にもパウロのように何かの手仕事をし、あるいは別の働きをすることができる。自己の無力を認識し、しかしなお神に謙そんにたよりつつ、その働きを進めてゆくとき、祝福された経験を得る。主イエスは、彼らの前に行き、裕福な人々のうちでも貧しい人のうちでも、好意と助けを見いだすのである。

外国の医事伝道者となるために教育を受けた人々は、働こうとしている場所に猶予することなくおもむき、その人々の間で働きを始め、働きながらその国語を学ぶように奨励されなければならない。そうすれば、まもなく神のみ言葉の簡単な真理を教えることができるようになる。

恵みの使者は全世界に必要とされている。暗黒と誤謬の中にある地方や外国の伝道地に行き、同胞の困窮を知り、主のために働くようにクリスチャンの家族が召されている。もし、こういう家族が世界の暗い場所、人々が霊的な暗黒の中に閉ざされている場所に住み、キリストの生命の光を輝かすならば、どんなに尊い働きができることであろう。」（ミストリー・オブ・ヒーリング 126, 127）

3. 神聖な保護

a. 試練のただ中でパウロの働きが実を結んだのは、なぜですか（使徒行伝 18:5-8）。

「このことを厳粛に、熱心に語ると、聞く者たちは、〔パウロ〕が、十字架にかけられて、よみがえられた救い主を、心から愛しているのだと認めざるを得なくなった。彼らには、パウロの心がキリストに向けられ、彼の全生涯が主に結びつけられているのだとわかった。彼の言葉は非常に心を動かすものだったので、無感動でいることができたのは、ただキリスト教に対する激しい憎悪に満たされていた者たちだけであった。

しかしコリントのユダヤ人は、使徒パウロによってはっきり示された証拠に目を閉じ、彼の訴えを聞こうとしなかった。キリストを拒むに至ったのと同じ精神から、彼らはキリストのしもべに対して激しい怒りに満たされた。パウロが福音使命を異邦人に伝え続けることができるよう、神が特別にパウロを保護されなかったら、彼らはパウロの息の根をとめてしまったであろう。

複雑な、遠まわしの論法を避けて、十字架の使命者たちはこの世の創造主、宇宙の最高の統治者のご性質を強調した。彼らの心は神とみ子への愛に燃え、彼らは人類のためにささげられた無限の犠牲を見上げるようにと異邦人に訴えた。彼らは、異教の中で暗中模索を続けてきた人々が、カルバリーの十字架から流れてくる光さえ見ることができれば、あがない主のもとへと導かれることを知っていた。」(患難から栄光へ上巻 268, 269)

b. 何がコリントにおいてパウロを強固にしましたか（使徒行伝 18:9-11; コリント第一 2:2, 5）。

「パウロはコリントでいくらかの成功をおさめたが、なおこの墮落した都市の邪悪さを見聞きして、ほとんど落胆しそうになった。異邦人の墮落ぶりを目撃し、ユダヤ人からは軽蔑と侮辱を受けて、彼は激しく苦悶した。そして、そこに見いだされる人材で教会を築こうとすることは知恵のないことではないかと、おぼつかない気持ちになった。

パウロがもっと有望な伝道地を求めてこの町を去ろうと計画し、自分の義務をさとりたいたと熱心に求めたとき、主は異象を通して彼に臨み、そして、言われた、『恐れるな。語りつづけよ、黙っているな。あなたには、わたしがついていく。だれもあなたを襲って、危害を加えるようなことはない。この町には、わたしの民が大ぜいいる。』パウロは、このことがコリントにとどまれとの命令であり、またまかれた種を主がふやされるとの保証であるとさとした。力づけられ、勇気づけられて、彼は熱心に、辛抱強くそこで働きつづけた」（同上 270）

4. ご自分の働き人のための神の配慮

- a. パウロに対するご自分のみ約束に調和して、神はどのように使徒に対する次の企みが裏目に出るようにガリオをお用いになりましたか（使徒行伝 18:12-17）。

「パウロがヨーロッパで働くようになって以来はじめて、群衆は彼に味方した。総督の見ていた前で、しかも、彼の干渉も受けずに、彼らは使徒を訴えた有力者たちにはげしく襲いかかった。」（患難から栄光へ上巻 275）

- b. パウロはどの働きを続けましたか。そしてアポロを育て、福音のためにもう一人役立つ人材にするため、神はだれをお用いになりましたか（使徒行伝 18:22-28）。

「彼は、福音の真理を知らない人が多くいる場所で、献身した信徒が何をすることができるといことを、実際的方法で説明した。彼の行動は、卑しい労働者たちに励ましを与え、日毎の仕事によって生活を支えと同時に、神の働きを前進させるために彼らのなし得ることをしようという願望を起こさせた。アクラとプリスキラは、その全時間を福音の宣教のためにささげるようには召されなかったが、これら身分の卑しい働き人たちは、アポロに真理をさらに完全に示すために、神に用いられたのである。主は、ご自分の目的を達成なさるために、種々の器をお用いになる。そして、特別の才能をもった人々が、福音を教え、説教する働きにその全精力をささげるように選ばれる一方において、按手礼を受けていない他の多くの人々が、救霊の重要な務めを行うように召されているのである。

自給伝道者の前に広い働き場が開かれている。多くの者は、時間の幾分かを何かの労働に携わりながら、伝道の尊い経験を得ることができる。そして、このような方法によって、助けを必要としている伝道地の重要な働きのための強力な働き人が養成されるのである。

宣教と教えとのために、たゆまず労している自己犠牲的の神のしもべは、心に重い荷を負っている。彼は、その働きを時間ではからない。彼の働きは、給料に影響されることなく、また、不利な状況下にあるからといって、義務を怠らない。彼は、天から任命を受けた。そして、ゆだねられた働きが終わったときに、彼は、その報賞を天から受けることを望むのである。」（同上下巻 36, 37）

5. 信徒を鼓舞させるもの

- a. パウロの自発的な伝道の働きの模範は、今日、どのようにわたしたちを鼓舞し、動機づけますか (使徒行伝 20:33, 34; 詩篇 126:6)。

「神に謙遜に寄り頼み、家族はこのお方のぶどう畑の荒れ地に定着すべきである。献身した男女が、地の荒野における義の実を結ぶ木として立つ必要がある。真理のためにまわく彼らの自己犠牲的な努力の報いとして、豊かな収穫を刈り取るようになる。彼らが家族を次々と訪問し、闇の中にいる人々に聖書を開くとき、多くの人の心に触れるであろう。

多くの働き人たちが行くことを拒むような障害が多く失望するような状態の伝道地で、自己犠牲的な平信徒たちの努力によって、良い方向にむかう最も顕著な変化をもたらすことができる。これらのつつましい働き人たちは、人間の力ではなく、自分たちに恩寵を賜わる神に頼りながら、忍耐強く辛抱強い努力を払うために、多くのことをなし遂げる。これらの働き人たちのなし遂げた善の量は、決してこの世で知られることはない。

自給伝道者たちはしばしば非常に成功する。小さくつつましい方法で始め、彼らの働きは神の御霊の導きの下に進められて広がっていく。二人かそれ以上の者で伝道の働きを始めなさい。彼らは働きの長である人々から何か特別な資金的な援助を与えられるという励ましを受けないかもしれない。しかし、彼らに働きに行かせなさい。祈りながら、讃美しながら、教えながら、真理を生きながら。彼らは文書伝道の働きに取りかかることができる。そしてこの方法によって多くの家族に真理が持ち込まれる。…彼らは神が与えて下さるメッセージを携えて行く。すると、彼らの努力は成功をもって報いられる。このようなつつましい教師たちがいなければ、決してキリストへと勝ち取られるはずがなかった多くの人々が、真理の知識へと導かれるようになる。」(教会への証 7 巻 22, 23)

個人的な復習問題

1. 物質的な財産に関して、どの模範がクリスチャンに与えられていますか。
2. パウロのコリントにおける伝道活動にならうために、わたしはどのような段階を踏むことができますか。
3. キリストがそこでパウロにお与えになった夢から、わたしはなぜ励ましを受けることができますか。
4. わたしは自分が知っている「アポロ」になるかもしれないだれのことをイエスへ導くことができますか。
5. 神のみ言葉の種をまくすべての人のための約束をいくつか挙げなさい。

暗黒からの救出

暗唱聖句：「また信者になった者が大ぜいきて、自分の行為を打ちあけて告白した。」
(使徒行伝 19:18)

「多くのキリストの誠実な信者が〔エペソの弟子たちのような〕同じ経験をしてきた。神のご意志をより明確に理解することで、人は神との新しい関係に置かれる。新しい義務が明らかにされる。かつては無害に見えた、あるいは賞賛に値するようにさえ見えた多くのことが、今や罪深いものとして見えるのである。」(パウロの生涯からのスケッチ 133)

推奨文献： 青年への使命 269-280;
患難から栄光へ上巻 304-313;
教会への証 5 巻 191-199

日曜日

8月8日

1. より大きな光に入る

a. 自分たちの経験においてより大きな光へ導かれたエペソのある弟子たちの取った手段から、わたしたちは何を学ぶことができますか (使徒行伝 19:1-7)。

「ヨハネの手でバプテスマを受けたとき、彼らは罪を負うかたとしてのイエスの使命を完全には理解していなかった。彼らは重大な思いちがいをしていた。しかしもっと明るい光がのぞんだとき、彼らはよろこんでキリストをあがない主として受け入れた。この進歩とともに、彼らの責任も変わってきた。彼らが一層純粋な信仰を受け入れたとき、彼らの生活はそれに応じて変化した。この変化のしるしとして、またキリストに対する信仰の表明として、彼らはイエスの名によってバプテスマを受けなおしたのであった。」(患難から栄光へ上巻 308)

「それは大きな特権と祝福としてあつかわれるべき事柄であり、再バプテスマを受けるすべての人は、もし彼らがこの主題について正しい考えを持っていれば、そのようにみなすであろう。……

主は確固たる改革を求めておられる。そして魂が真に再改心した時、彼に再バプテスマを受けさせなさい。彼に神との契約を新たにさせなさい。そうすれば神は彼との契約を更新なさるであろう。」(伝道 375)

2. 真の奇跡 対 偽りの奇跡

a. エペソにおける二年間のパウロの働きを述べなさい (使徒行伝 19:8-12)。

「パウロが、エペソの偶像崇拜をする者たちと直接接触することになったとき、神の力が彼を通して顕著に現わされた。使徒たちは、いつでも思いのままに奇跡を行うことができたわけではなかった。主はご自分のみ事業の進展やみ名の誉れが必要とするときに、この特別な力をご自分の僕たちにお与えになったのである。パロの宮廷でのモーセとアロンのように、いま使徒たちは魔術師の偽りの不思議に対して真理を維持しなければならなかった。それだから彼が行った奇跡は、それまで彼が行ってきた奇跡とは異なる性格のものであった。キリストの衣のふちが、信仰によって触れることで救いを求めた女性に癒しの力を伝達したように、この場合も、衣服が信じる者のすべてに対する治療の手段とされた。『病気が除かれ、悪霊が出て行くのであった』。けれどもこれらの奇跡は、盲目的な迷信を助長するものではなかった。イエスは苦しんでいる女性が触れたことを感じられたとき、このお方は『力がわたしから出て行ったのを感じたのだ』と叫ばれた。同様に聖書は、主がパウロの手によって奇跡を行われたこと、パウロの名でなく、主イエスのみ名が高められたことを宣言している。」(SDA パイブル・コメント [E・G・ウィット・コメント] 6 巻 1063, 1064)

b. どのようにキリストのみ名の神聖さが立証され、多くの者に自分たちの生活の中の誤った習慣を再度吟味させましたか (使徒行伝 19:13-18)。

「イエスのみ名を冒瀆していた人々の当惑と屈辱は、まもなくエペソ中にユダヤ人にも異邦人にも知れ渡ることになった。そのみ名の神聖さと、キリストの神聖な使命を信じる信仰を持っていないときにそれをとなえる人々が被る危険について間違いのような証拠が与えられた。恐怖が多くの人々の思いをとらえ、福音の働きは、すべての人に畏敬と敬神の念をもって見られた。

かつては隠されていた事実がいまや明るみに出された。キリスト教を受け入れる際に、兄弟たちのある者は、自分たちの異教の迷信を完全には捨ててこなかった。魔術の習慣はなお彼らの間である程度続けられていた。最近起こった出来事により、自分たちの過ちを確信し、彼らはパウロのところへ来て完全に告白した。そして公に自分たちの欺瞞的でサタン的な秘密のわざを認めた。」(パウロの生涯からのスケッチ 136, 137)

3. すべてを明け渡す

- a. どの種類の段階が人生における真の改心を明らかにしますか（使徒行伝 19:19, 20）。

「エペソ人は改宗した時に、それまでの習慣と行為を変えた。彼らは神の霊のさとしに直ちに応じ、魔法の秘密を全部公開した。彼らはやってきて自分たちの行為を告白した。自分たちがこれまで魔術に専念し、その魔法を行うようにサタンの考案した方法の書かれている本を尊んでいたことについて、彼らの魂は聖なる憤りに満たされた。彼らは悪魔の奉仕から離れようと決心し、その高価な書物を持ってきて衆人の目の前で焼いた。こうして彼らは神に立ちかえる真心をひれぎしたのであった。

エペソ人が福音に改宗した時に炎の中に投じた書物は、それまで彼らがよろこんで読み、また彼らの良心を支配し、その考えをみちびいていた本であった。その本は売ることでもできたであろうが、しかしそうすれば悪はいつまでも絶えることがない。彼らは後になってサタンの奥義である魔術を憎み、これまで自分たちがその本から得ていた知識をいやな気持ちでみるようになった。真理に結びついている青年たちに、わたしはたずねたい。あなたがたは魔術の本を焼いたであろうか。

世の中には懷疑、不信、無神論などの種子をまく本がはらんしていて、あなたがたは程度の差こそあれそうした本から教訓を学んでいたのであるが、それこそ魔術の本なのである。そうした本は心の中から神を追い出し、魂を真の羊飼であるキリストから離れさせる。」（青年への使命 273, 274）

- b. まじないや魔術に対して、昔、天から送られた警告のいくつかを挙げなさい（イザヤ書 47:9-14; マラキ書 3:5）。

「心霊術によって、多くの病人や遺族や好奇心の強い人々が、悪霊と交わっている。これをあえて行う者はみな危険な場所にいる。……

今日の心霊術の霊媒、透視者、占い師たちは、異教の時代の魔術師たちに当たる。エンドルやエペソで語った神秘的な声は、今もなお、その偽りの言葉で人の子らを惑わしている。…… 人間に神を忘れさせるような力が働いているところではどこでも、サタンがその魔力を働かせているのである。」（患難から栄光へ上巻 313）

4. 「日の下には新しいものはない」

- a. わたしたちの時代のために、まじない（心霊術）や魔術に対して、どのような警告が再び強調されていますか（エペソ 5:11; 黙示録 22:14, 15）。

「心霊術の霊媒の勧告を求めることを嫌悪する多くの人々が、さらに好ましい形態の心霊術に心をひかれているのである。他の人々は、クリスチャンサイエンスの教えや、神知学の神秘主義や、その他東洋の宗教にまどわされている。」（国と指導者上巻 178）

「異教礼拝の神秘が、わたしたちの時代の魔術の秘密連合や降霊術の会、不明瞭さや不思議に取って代わられた。彼らの公表は神のみ言葉から、あるいはその御霊からの光を受け入れることを拒む幾千もの人々に熱心に受け入れられる。彼らは昔の魔術師たちについては嘲って話すが、大欺瞞者は自分の異なる形態のわざに彼らが屈するとき、勝利のうちに笑う。

彼の代理者たちは病気を癒すと主張する。彼らは自分たちの力を電気や磁気、あるいはいわゆる『共鳴治療』と言われるものの結果だと考える。実際には、それらはサタンの電流の媒体に過ぎないのである。この手段によって、彼は人の体と魂に自分の魔法をかける。

このクリスチャン時代とクリスチャン国家において、生ける神のみ力に信頼するよりも悪霊に訴える人は少なからずいる。自分の子どもの病床のかたわらで看護している母親は、『わたしにはこれ以上できることがない。わが子を回復する力のある医者はいないのでしょうか』と叫ぶ。彼女は、ある余予知能力あるいは磁気治療者によってなされるすばらしい治療について教えられる。そして彼女は自分の愛しいものを彼に任せ、あたかもサタンが自分のかたわらに居るかのよう、まさにサタンの手中においてしまうのである。多くの場合、その子の将来は、破ることのできないように思われる悪魔的な力に支配される。」（教会への証 5 巻 193, 194）

- b. エペソの後のパウロの次の目的地は何でしたか。それにもかかわらずその間にどのような複雑な問題が発生しましたか（使徒行伝 19:21-29）。

「エペソでは、アルテミスの宮や像にかたどった小さな神殿や像の製造販売から、手広く利益の多い商売が発達していた。この産業に利害関係のある人々は、自分たちのもけが少なくなっていくことに気がつき、このおもしろくない変化はパウロの働きのせいだと、みなで言い合っていたのである。」（患難から栄光へ上巻 315）

5. 神の介入

a. 職人の暴徒たちが引き起こした危険について述べなさい（使徒行伝 19:30-34）。

「パウロのかくれ場所はそれほど遠いところではなかったので、彼はすぐに愛する兄弟たちの危険を知った。自分自身の安全など忘れて、彼はすぐに劇場へ行って暴徒たちに演説したいと望んだ。しかし、『弟子たちがそれをさせなかった』。ガイオとアリストアルコは、人々が探していた獲物ではなかったので、ふたりにひどい危害が加えられるおそれはなかった。しかし、もし、使徒パウロの心痛に青ざめた顔を見たら、群衆はすぐさま最悪の興奮状態となり、彼の命を救う可能性は全くないであろう。」（患難から栄光へ上巻 316）

b. 神はこの騒動を止めさせるために、どのように市の書記役をお用いになりましたか（使徒行伝 19:35-41）。

「デメテリオは演説の中で、『これでは、お互の仕事に悪評が立つおそれがある』と述べたが、こうした言葉は、エペソにおける騒動の本当の原因、また、使徒たちの活動に伴った迫害の主な原因を、明らかにしている。デメテリオや仲間の職人たちは、福音が教え広められることによって、偶像造りの商売が危機に瀕するのを見た。異教の祭司や職人たちの収入は危うくなった。この理由で、彼らはパウロに激しく反対したのである。

市の書記役やその他要職にある人々の裁定で、パウロは不法な行為に何の関係もない者であることが人々の前に明らかにされた。これは誤謬と迷信に対するキリスト教の再度の勝利であった。神は、ご自分の使徒を弁護し、騒いでいる暴徒を静めるために、一人の偉大な長官をお立てになったのであった。パウロは自分の生命が保護され、またエペソの騒動でキリスト教に汚名がきせられなかったことで、神への感謝の念に満たされた。」（同上 319）

個人的な復習問題

1. なぜエペソにいる 12 人の弟子たちにとって再バプテスマが適切だったのですか。
2. なぜ、遍歴しているユダヤ人たちは、イエスの名を使っても祝福されなかったのですか？
3. わたしを取り除くべき「魔術の本」とは何ですか？
4. 現代の心霊術のどのわなが、わたしを個人的に危険におとし入れるかもしれませんか。
5. 神は時々、ご自分の民をお救いになるのに、どのような思いがけない方法をお用いになりますか。

無我の宣教の働き

暗唱聖句：「わたしは、人の金や銀や衣服をほしがったことはない。あなたがた自身が知っているとおり、わたしのこの両手は、自分の生活のためにも、また一緒にいた人たちのためにも、働いてきたのだ。わたしは、あなたがたもこのように働いて、弱い者を助けなければならないこと、また『受けるよりは与える方が、さいわいである』と言われた主イエスの言葉を記憶しているべきことを、万事について教え示したのである。」(使徒行伝 20:33-35)

「わたしたちが人々に語る言葉だけでなく、わたしたちの個人に関わるすべてが、彼らへの説教となるべきである。」(教会への証 2 巻 618)

推奨文献： 患難から栄光へ上巻 320, 321, 下巻 74-92

日曜日

8月15日

1. 神からの奇跡

- a. エペソの後、パウロはどこへ行きましたか (使徒行伝 20:1-5)。
- b. パウロがトロアスにいた土曜日の夜、たくさんのあかりがともしてある屋上の間で説教していたときに、何が起こりましたか (使徒行伝 20:6-12)。

「パウロが兄弟たちのところにとどまっていた最後の晩に、彼らは『パンをさくために集まった』。愛する教師が去ろうとしているので、平常より多くの人々が集まった。彼らは、三階の『屋上の間』に集まっていた。パウロは、彼らを熱烈に愛し、深く気づかっていたので、真夜中まで説教した。

ユテコという若者が、開いた窓に腰かけていた。彼は、この危ない場所で眠ってしまい、下の庭に落ちた。たちまち人々はあわてふためき、大騒ぎになった。若者をかかえ起こしてみると、もう死んでいた。そして、多くの人々が彼のまわりに集まって、嘆き悲しんだ。しかしパウロは、驚きあわてる人々の間をとおって、若者を抱き、神が彼を生きかえらせて下さるように、熱心な祈りをささげた。彼の祈りは聞かれた。」(患難から栄光へ下巻 76)

2. キリストのための使命において

- a. なぜパウロは彼の同胞の旅行者たちから、一時的に離れたのですか（使徒行伝 20:13）。

「パウロと同行者たちが旅を続けることになっていたその船が、まさに出帆しようとしていたので、兄弟たちは急いで乗船した。しかし、パウロ自身は、トロアスとアソス間の陸路の近道を行き、アソスで、仲間たちに会うことにした。こうして彼は、しばらくの間、瞑想と祈りの時間を持つことができた。今回のエルサレム訪問に伴う困難と危険、彼および彼の働きに対するエルサレム教会の態度などが、諸教会の状態のことや、他の伝道地における福音の働きの進展の状況などと共に、彼が真剣に憂慮した問題であった。そして彼は、この特別の機会を活用して、神の力と導きを求めた。」（患難から栄光へ下巻 76, 77）

- b. パウロはどこに向かいましたか。そしてその途中で何をしましたか（使徒行伝 20:14-17）。

- c. パウロはエペソ人に対してどのような厳粛なメッセージを持っていましたか（使徒行伝 20:18-27）。

「パウロは、このような言明をするつもりはなかった。しかし、彼が語っていたときに、聖霊の靈感を感じ、エペソの兄弟たちと会うのはこれが最後かもしれないと考えたことが事実になることを示された。」（同上 78）

- d. 牧する指導者たちは、何を第一に心にとどめておく必要がありますか（使徒行伝 20:28）。

「不義のうちに真理を持ち、それを信じることを宣言していながら、矛盾した生活によって毎日それを傷つけている者は、サタンの奉仕に身をゆだね、魂を破滅に導いている。」（教会への証 5 巻 142）

「神の教会はキリストの血によって買われたものであり、すべての牧者は自分の保護の下にある羊たちには価がつけられないほど高価な額が払われたことを悟るべきである。彼らは羊を、最高の価値がある自分たちの世話に委ねられたものとみなし、自分たちの奉仕には厳密な説明責任が求められることを悟るべきである。」（霊的賜物 3 巻 125）

3. 真理の力

- a. 教会はどのような重大な危険を警戒する必要がありますか（使徒行伝 20:29, 30）。

「この終わりの時代ほど、人間の歪んだ論争によって真理が誤って伝えられ、軽視され、欠点ありとされて傷つけられた時代はかつてなかった。……人々は何か風変わりな新しいことに魅せられて、人間が何ものであるかのように作り上げた考えの性質を見極める経験において賢明でない。しかし何かを重大なものと呼んで、それを神のお告げに結び合わせても、それが真理になるわけではない。ああ、これがどれほど、諸教会における低い敬神の標準を譴責していることであろう。何か独特なものを提示したがう人たちは、新奇なことを思い浮かべ、考慮もせずに、尊い理論として織り上げられたこれらの不安定な理論をもって出しゃばり、そしてそれを生死に関わる問題として示すのである。」（SDA パイブル・コメント [E・G・ホイト・コメント] 6 巻 1064）

- b. パウロの模範と言葉は、キリストご自身の教えをどのように反映していましたか（使徒行伝 20:31-35）。

「[パウロ] がその労苦にやつれた手を人々に差し出したとき、彼が自分の生活を支えてもらうためにだれにも責任を負わせてはこなかったことを証した。これらの手はキリスト教伝道で一役買った他のだれよりも賢明で、知的で雄弁であった彼の感動的訴えの力を損なうものではないと、彼は考えた。……

われわれはすべての伝道者があらゆる点においてパウロがしたと同じようにする義務があるとは考えない。だがすべての人にパウロは最高のクリスチャン紳士であったと言うのである。彼の模範は、だれであれ機械工の労苦がその人の感化力を弱める必要はないことを、また手ずから立派な職業において働くことが、人を下品で粗野で無作法にするのではないということを示している。」（同上）

- c. パウロの心からの訴えに人々がどれほど深く感動したかを、何が明らかにしていますか（使徒行伝 20:36-38）。

4. 恐れなく、断固とした

- a. 宣教団が旅をしていると、ツロでどのような警告が伝えられましたか。また彼らはそこから出発する前に何をしましたか（使徒行伝 21:1-5）。
- b. 彼らは次にどこへ行きましたか（使徒行伝 21:6-9）。
- c. パウロにまたどのようにもう一つの警告が伝えられたか、また、彼がどのように応じたかを述べなさい（使徒行伝 21:10-14）。彼の献身はどのようにわたしたちを鼓舞しますか。

「パウロはどこへ行っても温かい心を引きつけた。彼の魂はいつも自分の兄弟たちの魂に結びついてた。彼が、彼らを離れるとき、彼らが再び彼の顔を見ることはないことを知り、それを彼らに断言したとき、彼らは悲しみに満たされ、あまりに熱心に彼に自分たちととどまるように懇願したので、彼は叫んだ、『あなたがたは、泣いたり、わたしの心をくじいたりして、いったい、どうしようとするのか』。彼の同情する心は、この最終的な別れに際し、彼らの悲しみを見て感じたときに張り裂けた。彼らは彼を愛しており、彼を渡してしまうことはできないと感じた。パウロの品性に敬服しないクリスチャンがいるだろうか？真理を擁護するときには岩のように固く、自分の友人たちに囲まれているときには幼子のように愛情深くてやさしかった。」（ビュー・アンド・ヘラルド 1885 年 9 月 8 日）

「魂を正しく保ちなさい。次が魂の言葉となるようにしなさい。『わたしは神を、このお方のみ摂理を、聖書を、真理とその目的の清らかさを信じる。わたしは、自分の義務と主がわたしに課された要求から一点たりともそれることはできないし、そうするつもりはない。わたしは、この世での一時的な不都合という抑圧から解放されるために、聖なる事柄へのわたしの命にかかわる関心をほんのわずかでも犠牲にしようとは思わない。わたしはいつでも待ち、神と共にへりくだって歩む。柔和と謙遜と魂の単純さのうちに、主がわたしにご自分の時と方法に従って成功と勝利を与えて下さるまで歩むのである』。」（原稿リ-ス 12 巻 107）

- d. パウロがエルサレムに到着したとき、どのような知らせが彼にもたらされましたか（使徒行伝 21:15-21）。

5. 深刻な危険のうちにおかれる

- a. パウロに与えられた忠告と彼がどのように従ったかを説明しなさい（使徒行伝 21:22-26）。

「この譲歩は、〔パウロ〕の教えにも、彼の品性の堅固な高潔さにも調和していない。彼の忠告者らは無謬ではなかった。これらの人々のうち何人かは神の靈感の下に書いたのであるが、それでもその直接の感化の下にいない時は、時々過ちを犯したのである。」（SDA バイブル・コメント [E・G・ホワイト・コメント] 6 巻 1065）

- b. この行動の悲惨な結果と、どのようにパウロの命だけが救われたのかを述べなさい（使徒行伝 21:27-32）。歴史はどのように繰り返しますか。

「エリヤはイスラエルを悩ます者と言われ、エレミヤは裏切者と言われ、パウロは神殿を汚す者と言われた。その当時から今日に至るまで、真理に忠誠を尽くそうとする者は、治安を妨害する者、異端者、分離者と非難されてきた。預言の確実な言葉をなかなか信じようとしなない群衆は、その時代の罪を大胆に譴責する者への非難を、なんの疑いもなく受け入れる。この精神は、ますます増大している。そして聖書は、国家の法律が神の律法と激しく衝突するために、神のすべての戒めに従おうとする者は悪事を行なう者として非難され罰せられるようになる、という時が近づきつつあることをはっきりと教えている。」（各時代の争闘下巻 183）

個人的な復習問題

1. 週の初めの日の集会はいつでしたか。どのようにしてそれがわかりますか。
2. 使徒パウロは、信仰のうちに魂を導くことについて、わたしに何を教えますか。
3. パウロと今日の公言する多くの説教者との対照を説明しなさい。
4. なぜパウロはあれほど献身的な伝道者だったのでしょうか。そしてどのようにしてわたしはもっと彼のようになることができますか。
5. どのように、そしてなぜパウロに対するような迫害が、まもなく繰り返されるのですか。

長く苦難の下にいた使徒

暗唱聖句：「すると、主がわたしに言われた、『行きなさい。わたしが、あなたを遠く異邦の民へつかわすのだ。』」（使徒行伝 22:21）

「このように、キリストと結合する召しを受けた者は、彼に従うためにすべてを捨てなければならぬのである。」（キリストの実物教訓 14）

推奨文献： 患難から栄光へ下巻 93-104

日曜日

8月22日

1. キリストを明らかにする

- a. パウロの扱いはわたしたちに何を思い起こさせますか（使徒行伝 21:33-36；ルカ 23:18）。

「神の御子が裁判にかけられたとき、ユダヤ人たちは『あれをやっつけてしまえ、彼を十字架につけよ』と叫んだ。なぜならこのお方の純潔な生涯と聖なる教えが彼らの罪を自覚させ、非難したからである。同じ理由のために多くの者は心のうちに神のみ言葉に反対して叫ぶのである。」（両親、教師、生徒への勧告 425）

- b. なぜ神のみ摂理はパウロの答弁に道を開いたのですか（使徒行伝 21:37-39）。

「騒動のただ中で、使徒は落ち着き、冷静さを保っていた。彼の思いは神にとどまっており、彼は天の御使たちが彼の周りにいることを知っていた。彼は自分の同郷の人々の前に真理をすすめる努力を払わずに宮を去ることができなかった。そこで彼は司令官に向き直り、ギリシャ語で彼に違った態度で語り、『一言あなたにお話ししてもよろしいですか』と言って…民に語ることを許してもらうよう請うた。主はご自分の僕に、ローマの役人に対する感化力をお与えになり、要求はかなえられた。」（パウロの生涯からのスケッチ 218）

2. 気高い答弁

a. パウロの答弁の強調点をいくつかあげなさい（使徒行伝 21:40; 22:1-11）。

「使徒は、キリストを信じるすべての人を迫害する者からキリストを信じる者となった自分の改心のことを、決して忘れることができなかった。彼の改心はその後の彼の人生にどれほど影響があったことであろうか。彼が、かつてあざけり軽蔑したお方の側に立って働いていたとき、それはどれほどの励ましであったことか。彼は自分の伝道の開始にあたって知らされた保証を決して忘れることができなかった。彼には主イエス・キリストについての経験、個人的な知識があったので、知的に話すことができた。彼は自分の働きのすべてにキリストのご臨在を感じる感覚を育んでいた。彼には生きた永続的な信仰があった。彼は祈って力を受け、キリストの忠実な兵士として常に待って自分の司令官を見上げていた。」（SDA バイブル・コメント [E・G・ホワイト・コメント] 6 巻 1065）

b. なぜパウロは、異邦人の世界に伝道するようにと神から受けた召しについて非常に確信していたのですか（使徒行伝 22:12-21）。

「主はパウロを、異邦の広い伝道地にはいるよう任命された。そして、この広汎で困難な働きに携わらせるために、神は彼をご自身としっかり結びつけ、恍惚として幻にとらえられた彼の眼に、麗しく栄光に輝く天の光景をお示しになった。」（患難から栄光へ上巻 171）

c. 群衆はパウロにどのように反応しましたか。そしてどのような結果になりましたか（使徒行伝 22:22-24）。

「〔ローマの将〕は、パウロがヘブル語で話していたことを理解しなかった。そして全体的な興奮から自分の囚人が何か大きな犯罪を犯したに違いないと結論づけた。…」

使徒の体は、一般の悪党のように、むちを受けるためにのばされた。彼のかたわらに立つ友人はいなかった。彼はローマの兵舎にいて、ただ野蛮な兵卒たちに囲まれていた。」（パウロの生涯からのスケッチ 220）

d. なぜパウロはさらにひどい試練に苦しむことを免れたのですか（使徒行伝 22:25-29）。

3. 議会の前で

- a. 議会の前で、どのようにパウロの公判が始まりましたか。また彼は何を預言しましたか (使徒行伝 22:30; 23:1-5)。

「聖霊の感化の下で、パウロはキリストがユダヤ人の偽善を譴責して口にされたのと同様の預言的な告発を口にした。使徒によって宣告された裁きは、邪悪で偽善的な大祭司がユダヤ戦争で暗殺者に殺害された時に、恐ろしい成就を見た。」
(SDA パイブル・コメンタリ [E・G・ホワイト・コメント] 6 巻 1065)

- b. パウロはどのように賢明に公判の焦点の方向を変えましたか (使徒行伝 23:6-9)。

「パリサイ人は形式と習慣の外見上の遵守に関して非常に厳格であって、傲慢で現世的、かつ偽善的で、自己を義とする精神で満たされていた。サドカイ人は死者の復活と天使の存在を否定し、神に関しては懐疑的であった。これらの党派は、主に不適格な者たちで構成されていた。彼らの多くは習慣において放縱であった。」
(同上 5 巻 1077)

「両派は互いに議論し始め、こうして、パウロに対する反対の勢力が分散された。
.....

続いて起きた騒ぎの中で、サドカイ人は、なんとかしてパウロを捕らえて、彼を死刑にしようとしたが、パリサイ人は、力をつくして彼を保護しようとした。」(患難から栄光へ下巻 97)

- c. パウロはどのように保護されましたか。またこれはわたしたちに何を思い出させますか (使徒行伝 23:10)。

「神の前におけるわれわれの立場は、われわれが受けた光の量によってきまるのではなくて、われわれが持っているものをどう用いるかによってきまるのである。だからたとえ異教徒であっても、みとめることができるかぎり正しいことをえらぶとき、彼らは、大きな光を与えられて、神に仕えたと公言しながらその光を軽視し、その日常生活が告白と矛盾しているような人たちよりも、好ましい状態にあるのである。」
(各時代の希望上巻 295, 296)

4. 暗闇の中に一人でいる時

- a. 夜、城の刑務所に一人でいたあいだ、パウロが考えていたことは何でしたか。そして何が彼に慰めをもたらしましたか（使徒行伝 23:11）。

「後でパウロは、この日の苦い経験を思い返して、自分の行動は、神に喜ばれるものではなかったのではないかと考え始めた。結局、エルサレムの訪問は、間違っていたのであろうか。彼が、兄弟たちと団結することを熱望したことが、このような不幸な結果を招いたのであろうか。

パウロは、神の民と称するユダヤ人が不信の世界の前に示す態度に、深く心を痛めた。異教の将校たちは、彼らをどのように見ることであろう。彼らは、主の礼拝者であると称し、聖職にあるにもかかわらず、盲目的で不合理な怒りをほしいままに、信仰において意見の異なる兄弟たちさえ殺そうとした。そして、彼らの最も厳粛な議会を、紛争と混乱の場所にしてしまった。パウロは、神の名が、異教徒の前で屈辱をこうむったことを感じた。

今や、彼は、捕らわれの身となった。そして彼は、敵たちが、悪意の限りをつくして、彼を殺そうとしているのを知っていた。教会のための彼の働きはもうこれで終わり、今、狂暴なおおかみがいり込んでくるのであろうか。パウロにとって、キリストのみわぎは、重大な関心事であった。そして彼は、各地の教会の当面する危機について憂慮した。彼らは、パウロがサンヒドリンの議会において当面したのと同じような人々の迫害に会わなければならなかった。彼は、苦悶と失望のあまり、泣いて祈った。

主はこの暗黒の時に、ご自分のしもべをお忘れにならなかった。主は神殿の庭で、彼を暴徒の手から守られた。主は、サンヒドリンの議会において、彼と共におられた。主は、兵営において、彼と共におられた。そして、主は、導きを求めるパウロの熱心な祈りに答えて、ご自身を忠実なしもべにあらわされた。〔使徒行伝 23:11 引用〕」（患難から栄光へ下巻 98, 99）

- b. 神がパウロのために、そして荒野で一人であったダビデのためになさったように、暗闇の中にいるわたしたちを慰めたいと思っておられることが、何によって表されていますか（詩篇 63:5, 6）。

「どのような時、どのような場所でも、すべての悲しみすべての心痛の中で、見通しは暗く将来が当惑するよう見え、助けなく孤独であるとわれわれが感じる時に、信仰の祈りに答えて慰め主が送られるのである。」（クリスチャン奉仕 251）

5. 自分自身の国家から

- a. 翌日、魂の敵はどのような計画を考案しましたか（使徒行伝 23:12-15）。

「主が、主のしもべを激励しておられる一方において、パウロの敵たちは、さかんに彼を殺害する計画を立てていた。」（患難から栄光へ下巻 99）

- b. 邪悪な策略を暴くために主はだれをお用いになりましたか（使徒行伝 23:16-21）。

- c. どのように千卒長だけが計画をくつがえすことができましたか。またパウロに対する迫害から、わたしたちは何を悟るようになりますか（使徒行伝 23:22-33）。

「神のしもべが、主の民と公言する人々の憎しみを逃れて、異邦人の間に避難所を見いだしたことは、パウロの場合が最初ではなかった。……

ユダヤ人の指導者たちは、神の栄誉とイスラエルの幸福のために非常に熱心であると公言していたが、実のところ、彼らはこの両方の敵であった。彼らは、教えと行為によって、ますます、神への服従から人々を引き離し、悩みの日に、神が彼らの保護となることができないところへと彼らを導いていった。」（同上 102, 103）

「サタンは、神が偉大にして善なる働きを完成するために選ばれた人々を失望させて、滅びに陥れようと、絶えず彼の手下たちを用いて働いている。彼らは、キリストのみわぎを推進するためには、その生命を犠牲にすることさえ惜しまないのであるが、大欺瞞者は、彼らに対して疑惑を抱くように兄弟たちに示唆する。もし兄弟たちがそのような考えを持つならば、この人々の品性の誠実さに対する確信はくつがえされて、彼らの働きの有用性は阻害されるのである。」（同上 103, 104）

個人的な復習問題

1. パウロの行動はどのように彼の同胞と対照的でしたか。
2. 何が、パウロを自分に積み重なる苦しみに耐えられるようにしましたか。
3. 異邦人、パリサイ人またはサドカイ人のだれが、パウロを最もひどく扱いましたか。
4. なぜわたしたちは城の牢獄にいたパウロのための神の保護によって慰められることができるのですか。
5. ローマの千卒長とユダヤ人の対照的な態度を説明しなさい。

第一安息日献金 ドミニカ共和国の礼拝堂のために

ドミニカ共和国は、西側はハイチと分け合うヒスパニオラ島のカリブ海諸島の東部をなし、北は大西洋に面しています。世界級のビーチ、リゾート、ゴルフ、そして暖かく友好的な人々でよく知られた美しい熱帯気候の国です。ここでの自然界の美しさには、熱帯雨林、サバンナ、カリブ海における最高の山と共に高原があります。首都サント・ドミンゴは 5 世紀間に遡り、歴史的な建築上の遺跡が豊富です。

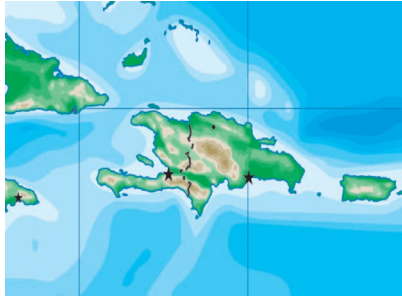
1,080 万人の人口の 80% がスペイン語を話し、続いてハイチ語、そしてサマナ英語を話します。経済は主に鉱業、農業、商業、サービス業に依存しています。公式な宗教はローマ・カトリックで人口のおよそ 40% が活動しているカトリックで、29% が活動していないカトリック、18% が伝道プロテスタント、11% が無宗教です。

SDA 改革運動がこの国に来たのは、1970 年代の初期で、アメリカ在住の伝道心を持ったドミニカ人が現代の真理を故郷に帰って自分の友人や家族に伝えることによってでした。これらの熱心な信徒たちは当時、人と会ってもっと効果的にメッセージを促進するため、拠点を变えて自分たちの生まれた島に戻りました。牧師がこの地域に派遣されて、神の力を通して、14 万 4 千人についての愛された SDARM の讃美が、聖書研究のための多くの扉を開くかぎとなりました。そして働きは 1976 年に組織されました。その時以来、メッセージはさらに遠くへ広まり、今や 150 以上の教会員と約 400 名の常に出席する安息日学校生徒がいます。

この成長に伴い、当然の結果、主を礼拝する礼拝堂の必要が生じました。神の恵みにより、わたしたちは島の北部ラ・サルヴィア、ボナオにこの目的のために土地を所有しています。ここでの建築はすでに始まっており、またサント・ドミンゴ県ロ・ミナ市区域に礼拝の家を主に捧げる計画を立てています。兄弟たちは自分の資金を惜しみなく献金してきました。しかし、この目的が実を結ぶためには、皆さんの援助が必要です。

第一安息日献金が集められるときには、この島国に神の栄光のために記念塔が輝くことができるように、どうぞ惜しみなく捧げて下さい。主が捧げ物と捧げる人を豊かに祝福して下さいようにお祈りします。

ドミニカ共和国から皆さんの兄弟姉妹より



清い良心で証をする

暗唱聖句：「わたしはまた、神に対しまして人に対して良心を責められることのないように、常に努めています。」（使徒行伝 24:16）

「神と人に対して責められることのない良心、人類に対して最もやさしい同情を感じ、特に彼らがキリストのために勝ち取られるようにと感じる心は、キリストが持つておられる特質を持っている。そのような人はすべてキリストの霊を吹き込まれるであろう。彼らは説得力の貯蔵庫と単純な雄弁さの倉を持つようになる。」（牧師への証 120）

推奨文献： 患難から栄光へ下巻 105-113

日曜日

8月29日

1. 弁護人テルトロ

- a. 総督ペリクスの前でパウロの取り調べを持ち出すために、どのようにへつらいの偽善や嘘が用いられたかを述べなさい（使徒行伝 23:34, 35; 24:1-9）。

「テルトロはここであつかましい偽りにまで身を落とした。ペリクスの品性は低俗で卑劣であった。…その行為の残酷さと抑圧によって、彼は全般的に広く憎まれていた。彼の品性の信用できない残酷さは、大祭司ヨナタン、すなわち自分自身の地位のために負うところが大きかった人を残酷に殺したことによって表されている。...

クプロの魔術師シモンの欺瞞的なわざを通して、ペリクスは〔ドルシラ〕に自分の夫を捨てて、自分の妻になるようにと仕向けていた。ドルシラはわかく美しく、何よりもユダヤ人であった。彼女は、自分の手を取るために大きな犠牲を払っていた夫に献身的につながっていた。彼女に最も強い偏見を越えて、残酷で年長の放蕩者と姦淫的なつながりを形成するために自らを自国家の嫌悪の対象にするよう説得するものは、実のところほとんどなかった。」（パウロの生涯からのスケッチ 235, 236）

「テルトロの話聞いた人々は、彼のへつらいの言葉が偽りであることを知っていた。しかし、真理を愛するよりは、パウロを罪に定めようとする願いのほうが強かった。」（患難から栄光へ下巻 106）

2. 完全な平安のうちに

- a. どのようにしてパウロはペリクスの前で率直に答弁を始めましたか（使徒行伝 24:10-13）。

「ペリクスは、パウロを告発する人々の性質と品性とを読み取る十分な洞察力を持っていた。ペリクスは、彼らが何の目的で彼にへつらったかを知った。そして彼はまた、彼らがパウロに対する告発の十分な証拠を提出し得ないことも見た。彼は被告に向かって、自己の弁明をするように合図した。パウロは、儀礼的なむだな言葉を言わないで、簡単に、ペリクスの前で自分を弁護できることを非常にうれしく思うと言った。それは、ペリクスが、長年にわたって総督を勤め、ユダヤ人の律法と習慣をよく理解していたからである。パウロは、彼に対する告発が、一つとして真実のものではないことを明らかに示した。彼は、エルサレムのどの場所においても、騒ぎを起こしたことはなく、また、神殿を汚してもいなかった。」（患難から栄光へ下巻 106, 107）

- b. パウロは総督にどのような概念を提示しましたか（使徒行伝 24:14, 15）。

「アダムの子のために、死は全人類に及んだ。だれでも同じように墓に下って行く。そして、救いの計画が設けられたことによって、すべての者が、墓からよみがえらせられるのである。」（各時代の斗争闘下巻 294）

- c. パウロの人生の目的は、なぜすべての人にとって益となるのですか（使徒行伝 24:16; イザヤ書 26:3, 4）。

「内なる平安と神に対して責められることのない良心は、やわらかい植物の上にする露のように、知性をよみがえらせ、活力を与える。意志はその時、正しく導かれ、支配され、そしてますます確固としていながら、ゆがみが無い。瞑想は、聖化されているために、よろこばしいものとなる。あなたが所有している思いの平静さは、あなたが交わるすべての人にとって祝福となる。この平安と落ち着きは、そのうち自然になり、その尊い光線をあなたの周囲にいるすべての人に反射するようになり、またそれがあなたに反射して戻ってくる。あなたがこの天の平安と思いの静けさを味わえば味わうほど、ますますそれは増していく。それは、あらゆる道徳的な精力を無感覚状態へ投げ込むのではなく、かえってそれらをますます活動的に目覚めさせる命ある生きた楽しみである。完全な平安は天使たちが持っている天の特質である。神があなた方を助けて下さってこの平安をもつものとして下さるように。」（教会への証 2 巻 327）

3. 永遠 対 都合

- a. どの問題がパウロに対するユダヤ人の怒りを引き起こしましたか（使徒行伝 24:17-21）。
- b. どのような意味において、ペリクスはこの問題の対処方法が弱かったのですか（使徒行伝 24:22, 23）。

「パウロは、熱誠こめて真心から語ったので、彼の言葉には、人々を感動させる力があつた。クラウド・ルシヤは、彼のペリクスへの手紙の中で、パウロの行動に関して同様の証言をしている。さらに、ペリクス自身、多くの者が想像する以上に、ユダヤの宗教について深い知識を持っていた。パウロの明白な事実の陳述によって、ペリクスは、ユダヤ人がどのような動機に動かされて、パウロを扇動と反逆の罪に陥れようとしているかを、さらに明らかに理解することができた。ペリクスは、ローマの市民を不当に罰して彼らに満足を与えることも、あるいは、パウロを彼らに引き渡して、正当な裁判をせずに死刑に処することもしたくなかつた。とは言え、ペリクスは、私利私欲以上の高尚な動機を知らず、賞賛を愛する心と昇進を欲する心に支配されていた。彼は、ユダヤ人を怒らせることを恐れたので、パウロに罪がないと知りつつも、彼を全面的に釈放することを差しひかえた。そこで、彼は、ルシヤが来るまで裁判を延期することに決めた。」（患難から栄光へ下巻 108）

- c. どのように、ペリクスのような態度は聖霊を悲しめますか（使徒行伝 24:24, 25）。

「〔ペリクス〕は、あわれみの最後の機会を軽視した。その後、彼は、二度と神からの召しを受けなかつたのである。」（患難から栄光へ下巻 115）

「〔兄弟 K の地域社会〕はもし彼らが真理に対して戦わないなら、自分たちが良くやっていると信じたが、彼らが受けて大切にすることをなおざりにした光は闇の中に消えていった。彼らは神の御霊に次のように言うことによって、良心を静めようと努力した。『きょうはこれで帰るがよい。また、よい機会を得たら、呼び出すことにする』。その都合の良い機会は決して来ることがない。彼らは二度と自分たちに来ることがない黄金の機会をなおざりにした。なぜなら、世が彼らの拒んだ光を閉め出したからである。この世の生涯の利益と興奮するような娯楽が彼らの思いと心を夢中にさせ、その一方では彼らの最上の友、祝福された救い主は拒まれ、忘れられている。」（教会への証 4 巻 108）

4. 言い訳、言い訳…

- a. キリストに完全に委ねないよくあるいくつかの言い訳と、それらすべての結果をあげなさい (ルカ 14:15-20, 24)。

「人びとは、いろいろの言いわけをして宴会への招待を断ったのであるが、それは福音の招待を拒む言いわけを網羅（もうら）している。人々は福音の要求することに耳を傾けることによって、彼らの現世の有望に思われるものを危険にさらすことはできないと主張する。彼らは永遠の事物より現世の利益のほうを重要視する。彼らが神から受けた祝福そのものが、彼らの魂を創造主とあがない主からひきはなすじゃま立てをする。彼らは、彼らの現世の利益追求を妨げられたくないので、あわれみの使者に向かってこう言う。『きょうはこれで帰るがよい。また、よい機会を得たら、呼び出すことにする』（使徒行伝 24:25)。他の人々は、神の召しに従うとき、彼らの社会的関係の中で起こると予想される困難を言い出す。彼らは、彼らの肉親や友人たちと仲たがいになることはできないと言う。こうして彼らは、彼らがたとえの中に描かれている人物の一人にほかならないことを、証明する。宴会の主であるお方は彼らの見えすいた口実を、ご自身の招待に対する侮辱であるとみなされるのである。

『わたしは妻をめとりましたので、参ることができません』と言った男は、大きな階級を代表する。神の召しに心を留めないのを自分の妻や夫のせいにするものが多くいるのである。『わたしの妻が反対するので、わたしはわたしの確信する義務に従うことができません。彼女の影響で、わたしはそうすることができないようになっています』と夫は言う。妻は、『さあ、おいでください。もう準備ができましたから』とのめぐみ深い招きを聞く。すると彼女は『どうぞ、おゆるしください、わたしの夫はあわれみの招待を断っています。彼は仕事がやりかけだと言っています。わたしは夫といっしょに行かなければなりません。ですからまいることができません』と言うのである。子供たちの心は感銘を受ける。彼らは行きたいと思う。しかし彼らは父母を愛している。両親が福音の招待に心を留めないで、子供たちは行つてはならないと思う。彼らもまた、『どうぞおゆるしください』と言う。

この人々は皆、家庭内に分裂がおこるのを恐れて救い主の招待を断わるのである。彼らは神に従うことを拒むことによって、家庭の平和と幸福を確保したと考えている。しかしこれは思い違いである。利己的な種をまくものは利己的な収穫を刈り取らなければならない。彼らはキリストの愛を拒むことによって、人間の愛に純潔と堅固さを与えることができる唯一のものを拒んでいるのである。彼らは天国を失うのみならず、天国を犠牲にしてまで得ようとしたものを真に楽しむことすらできなくなるのである。」(キリストの実物教訓 204, 205)

5. 制限なく注ぎ出される

- a. 言い訳をする代わりに、聖霊の導きに完全に明け渡すと何が起こりますか（使徒行伝 3:19; イザヤ 44:22, 23; 詩篇 110:3）。

「わたしたちは永遠の命のために参戦している。そしてこの戦いでは、恵みが性質にこぞって反対し、自己の強さがことごとく勝利へ向けて反対している。自己否定の道は十字架と並列しているが、これを見いだす者はほとんどなく、その道を行く者はさらに少ない。…あなたは善を行うことに辛抱強く、うまいであろうか。このクリスチャンの戦いは、骨折りと永遠の警戒の戦いである。完全な勝利は、もしあなたが快活にキリストの十字架を掲げるならば、あなたのものである。」（手紙と原稿, 手紙 48, 1888 年）

「神のしもべたちは、きよい献身の喜びに顔を輝かせ、天からの使命を伝えるために、ここかしこ奔走する。全世界の幾千の声によって、警告が発せられる。奇跡が行なわれ、病人はいやされ、しるしと不思議が信じる者に伴う。サタンもまた、偽りの不思議を行ない、人々の前で天から火を降らすことさえする（黙示録 13:13 参照）。こうして、地上の住民は、立場を明らかにしなければならなくなる。

使命は、議論によるよりも、神の霊の深い感動によって伝えられる。論拠はすでに示された。種はまかれた。そして今、それが生えて、実を結ぶのである。伝道者によって配布された文書は、その感化を及ぼした。しかし、感動を受けた人々の多くは、真理を十分に理解して、それに服従することを、妨げられていた。けれども、今、光は至るところにゆきわたり、真理は明らかにされ、神の忠実な子供たちは、彼らを束縛していたかさを絶ち切るのである。家族関係、教会関係は、もはや彼らを止める力がない。真理は他の何物よりも尊いのである。諸勢力が力を結集して真理に反対するにもかかわらず、多くの者が主の側に立つのである。」（各時代の大争闘下巻 382, 383）

個人的な復習問題

1. なぜ大祭司アナニヤはテルトロをパウロの取り調べに連れて行ったのですか。
2. なぜ告白と悔い改めによって清い良心を保つことが極めて重要なのですか。
3. わたしはどのように、人生のいくつかの分野でペリクスがしたように先延ばしにしているかもしれませんか。
4. わたしは御霊を消してしまう、どのような説得力のない言い訳をしているかもしれませんか。
5. どのようにわたしは満ちみちた聖霊の注ぎにあずかることができますか。

王に証言する

暗唱聖句：「しかし、わたしは今日に至るまで神の加護を受け、このように立って、小さい者にも大きい者にもあかしをなし、預言者たちやモーセが、今後起るべきだと語ったことを、そのまま述べてきました。」（使徒行伝 26:22）

「キリストの王冠はこの世の主権者の王冠より高く掲げられなければならない。」
（教会への証 6 巻 402）

推奨文献： 患難から栄光へ下巻 114-128

日曜日

9月5日

1. 光を拒む結果

- a. ペリクスがパウロによってもたらされた光よりも、世俗的な娯楽、食欲、そして野心的な政治を先に置いたとき、彼の人生において何が続きましたか（使徒行伝 24:26, 27）。

「〔ペリクス〕は、多額の金を支払えば釈放されることができると、ほのめかすのであった。しかし、パウロは、高貴な品性の持ち主であったので、わいろを使って自由を得ることは、とうていできなかつた。彼は、何の犯罪も犯していなかつたのであるから、自由を得るためにあえて悪を犯そうと思わなかつた。」（患難から栄光へ下巻 114）

「〔ギリシャ人とユダヤ人の間のカイザリヤでの争いにおいて〕ユダヤ人への敵意を年毎に増していたペリクスは、今や自分の兵士らに裕福な家から略奪する自由を与えた。

これらの向こう見ずな不正で残酷な行いが見過ごしにされるはずがなかつた。ユダヤ人はペリクスに対する公式の苦情を作成したので、彼は彼らの告訴に答えるためにローマへ召喚された。彼は、自分の搾取と圧制のやり方が彼らに苦情の根拠を十分に与えてきたことは分かっていたが、まだ彼らをなだめる望みを持っていた。それで、彼はパウロに対してまじめな尊敬心を持っていたのだが、彼を囚人のままにしておくことによって彼らの恨みを満足させることに決めた。しかし彼の努力はすべて無駄であつた。彼は追放あるいは死罪は免れたが、役職を解かれ、悪い手段で得た富の大部分を剥奪された。彼と共に有罪となったドルシラは、その後ベスビオスの噴火で一人息子と共に死んだ。彼自身は不名誉と無名の内に生涯を終えた。」（SDA パイブル・コメント [E・G・ホイト・コメント] 6 巻 1066）

2. 予期せぬ方法での安全

a. ペリクスに取って代わったフェストの政策を説明しなさい (使徒行伝 25:1-6)。

「フェストは、カイザリヤにおいてパウロを公正に裁判しようと固く決意したのである。神は摂理のうちに、フェストの決心をよいほうに導き、パウロのいのちを延ばされたのであった。」(患難から栄光へ下巻 117)

b. 審議はどのように進行し、また結果は何でしたか (使徒行伝 25:7-12)。なぜパウロはエルサレムへ行くよりもカイザルへ行く方が安全だったのですか (テモテ第二 3:12)。

「フェストは、ユダヤ人がパウロを殺害しようと陰謀をめぐらしていたことを何も知らなかったので、カイザルへのこの上訴を聞いて驚いた。しかし、パウロの言葉は、法廷の審議を終結させた。

神のしもべは、もう一度、偏見と自己を義とする精神から生じた憎しみのために、異邦人の保護を求めなければならなくなった。……そしてまた、この憎しみのゆえに、福音の使者たちはユダヤ人を離れて、異邦人に彼らの使命を伝えなければならなくなった。そして、現代の神の民は、今なお、同じ憎しみに当面しなければならない。キリストの弟子であると自称する多くの人々の中には、ユダヤ人の心の大半を占めていたのと同じ誇りや形式主義や利己主義、同じ圧迫の精神が存在しているのである。将来、キリストの代表者であると主張する人々が、キリストと使徒たちをあしらった祭司やつかさたちと同様の行為をするであろう。やがて、神に忠実なしもべたちが通過しなければならない大いなる危機において、彼らは、同様の心のかたくなさ、同様の残酷な決意、同様の頑強な憎しみに出会わなければならない。

来るべき悪しき日において、良心の命じるところに従って、恐れることなく神に仕えようとする者はすべて、勇氣と堅実さと、神および神のことばに対する知識を持つていなければならない。神に忠実な者は、迫害を受け、その動機は疑われ、その最善の努力は曲解され、その名は悪しき者として除外される。サタンは、あらゆる欺瞞の力を用いて人々の心に働きかけ、理解力をにぶらせ、悪を善と見せかけ、善を悪と見せかけようとする。神の民の信仰が強く純潔であればあるほど、そして、神に従おうとする彼らの決意が固ければ固いほど、サタンは、義人であると主張しながら神の律法をふみにじっている人人の怒りを、彼らに対して燃えたたせようとする。ひとたび聖徒たちに伝えられた信仰を固く保っていくには、最も堅固な信頼と最も英雄的な意志がなければならない。」(同上 118-120)

3. 神聖な任命

- a. 神のみ摂理のうちに、他にだれがパウロに会うことになっていましたか（使徒行伝 25:13-22）。

「パウロがカイザルに上訴していたので、フェストは彼をローマに送るよりほかに仕方がなかった。しかし適当な船が見つからないままに、しばらくの時間が過ぎた。……そのためにパウロは、カイザリヤの主立った人たちとヘロデ王家の最後の王であるアグリッパ二世の前で、自分の信仰について申し述べる機会が与えられた。」（患難から栄光へ下巻 121）

- b. 法廷においてパウロとアグリッパが最初に対面した時の場面を述べなさい。そして天はそれをどのように見ましたか（使徒行伝 25:23-27）。

「来賓たちのために、フェストはこの機会を印象的に見せびらかしたいと思った。総督や彼が招いた人たちの高価な衣服、兵士たちの剣、隊長たちのきらめくよろいが、この場の光景をきらびやかなものにした。

パウロは、まだ手錠をかけられたまま、集まった人々の前に立った。これは何と著しい対照であろう。アグリッパとベルニケは権力と地位を持っていて、そのために世人の支持を受けていた。しかし彼らは神が尊ばれる品性に欠けていた。彼らは神の律法を犯し、心も生活も堕落していた。彼らの行動は天に忌みきらわれていた。

年老いた囚人パウロは、警備の兵士につながれていて、その姿には世人が尊敬を払うようなものは何もなかった。しかし、神のみ子への信仰のゆえに囚人として留置され、友も富も地位もないように見えるこの男に、全天は関心をよせていた。天使たちが彼につきそっていた。もしもこの光り輝く使者たちの中のひとりの栄光が輝きわたったら、王者のはなやかさも誇りも色あせたであろう。王も廷臣たちも、キリストの墓にいたローマの番人たちのように、地に打ちのめされたであろう。」（同上 122, 123）

「全天は、このひとりの人物、すなわち今や神の御子を信じる自分の信仰のゆえに囚人としてとらえられている人に関心を持っていた。愛されたヨハネは次のように言っている。『世がわたしたちを知らないのは、父を知らなかったからである』。世はキリストを知らず、またキリストを例証する人々をも知らない。彼らは神の子であり、王家の子らである。しかし、彼らの王子としての主張は世に理解されない。その主張は自分の好奇心をそそるかもしれないが、評価されず、理解されない。それらは彼らにとって関心があるものではなく、うらやむものでもない。」（パウロの生涯からのスケッチ 254）

4. 悔い改めた罪人が声を上げる

- a. パウロがどのように証を始めたかということから、わたしたちは何を学ぶことができますか（使徒行伝 26:1-8）。

「キリスト教は人を紳士にする。キリストは、ご自分を迫害する者に対してさえ、礼儀正しかった。そしてこのお方に真に従う人々は、同じ精神を表すのである。役人たちの前に連れてこられたときのパウロを見なさい。アグリッパの前での彼の言葉は、説得力のある雄弁さの例証であると同時に、真の礼儀の例証でもある。福音は世の風潮である形式的な礼儀正しさを奨励しない。しかし、心の真の親切さからわきでる礼儀を奨励するのである。」（福音宣伝者 123）

- b. どのように使徒から心の謙遜さが発せられましたか（使徒行伝 26:9-11）。

「神のみ言葉にある真の悔い改めとへりくだりの模範は、罪の言い訳をしたり、自己義認を試みようとするものない告白の精神を表す。

パウロは自身を弁護することを求めなかった。彼は自分の罪を軽くしようとせず、自分の罪を最も暗い色で描いた。〔使徒行伝 26:10, 11 引用〕…彼はためらうことなく『キリスト・イエスは、罪人を救うためにこの世に来てくださった、…わたしはその罪びとのかしらなのである』と宣言した。」（教会への証 5 巻 641）

- c. パウロは彼の経験をどのように語りましたか。そしてイエスの再臨直前に今わたしたちにも、パウロに委ねられたどの義務が与えられていますか（使徒行伝 26:12-18）。

「〔キリストの〕み国は、このお方の恵みのよきおとずれが全地に伝えられるまで出現しないのである。それだから、わたしたちが自分を神にささげ、他の人々を神のためにかち取るとき、わたしたちはみ国の出現を早めるのである。自己を神の奉仕にささげ、盲人の目を開き、人々を『やみから光へ、悪魔の支配から神のみもとへ帰らせ、また、彼らが罪のゆるしを得、……聖別された人々に加わるため』に、『ここにわたしがおります。わたしをおつかわしてください』と言う者だけが、心から『御国がきますように』と祈るのである（使徒行伝 26:18, イザヤ書 6:8）」（祝福の山 136）

5. 与えられた貴重な機会

- a. パウロは彼の心の重荷として何を説明しましたか（使徒行伝 26:19-23）。
- b. フェストはどのようにして霊的識別力の足りないことを表しましたか（使徒行伝 26:24-26）。
- c. 聖霊がアグリッパをどのように力強く引き寄せていたか、そして悲しいことに、最終的に何によって彼がそれに抵抗したかを説明しなさい（使徒行伝 26:27-32）。

「これらの言葉を語ったアグリッパの思いは、自分の家族の過去の歴史とパウロが宣べ伝えていたお方に反対した彼らの無駄な努力を回顧したであろうか。彼はベツレヘムでの罪のない子供たちの大虐殺を行った曾祖父ヘロデのこと、大叔父アンテパスがバプテスマのヨハネを殺したこと、父アグリッパ1世が使徒ヤコブを殉教させたことを考えたであろうか。彼はこれらの王たちにたちまち起きた惨事に、神のしもべたちに対して行った彼らの犯罪のゆえに神の不興を買った証拠を見たであろうか。その日の虚飾と誇示は、アグリッパに自分よりも力のある君主であった父親が、人々が彼は神であると叫ぶ中で、きらきらと光る上着をまとってその同じ町に立った時のことを思い出させたであろうか。賞賛叫び声が鳴り響いている中で、どのように復讐が、たちまち恐ろしくそのうぬぼれの強い王に下って死んでいったことを忘れたのだろうか。これらすべてが、アグリッパの記憶をかすめたかが、彼らの虚栄心は目の前の輝かしい光景によって得意にさせられ、誇りとうぬぼれが、一切の高尚な思いを消してしまった。」（SDA バイブル・コメント [E・G・ホワイト・コメント] 6 巻 1066, 1067）

個人的な復習問題

1. ペリクスの人生の最期は、どのようにこの世の栄光が薄れゆくことを思いおこさせますか。
2. 裏切りに直面したとき、わたしたちはどのような資質を所有している必要がありますか。
3. パウロの場合のように、主はなぜ時々航海を遅らせられるのでしょうか。
4. 「万国を来たせたまえ」（マタイ 6:10）という祈りの中で、わたしは何を悟らなければなりませんか。
5. どのようにしてわたしは世の華やかさに気をとられる危険の中にいるかもしれませんか。

嵐のただ中での信頼

暗唱聖句：「だから、皆さん、元気を出しなさい。万事はわたしに告げられたとおり
に成って行くと、わたしは、神かけて信じている。」（使徒行伝 27:25）

「パウロの海上の旅を通して、神の特別な目的が果たされた。このお方は、こ
うして船員たちが神の力をパウロを通して神の力を目撃するよう意図しておられた」
（初代文集 346）

推奨文献： 患難から栄光へ下巻 129-137

日曜日

9月12日

1. 船に鎖でつながれる

- a. パウロの次の試練の場面は何でしたか。それでもルカ以外に他にだれが慰めでし
たか（使徒行伝 27:1, 2; コロサイ 4:10（前句））。

「ローマの兵卒は、自分の命をかけて、自分の囚人たちの安全に責任を負ってい
た。そのため、囚人の右手首と兵卒が互いに順番で左手首を鎖でつなぐのが慣習
となっていた。こうして使徒は自由に動くことができないばかりでなく、もっとも性
分のあわない全く不快な品性の人々と絶えず密接に接触する所へおかれた。無学
で精練されていないだけでなく、彼らの墮落させる感化により、野蛮で低俗になっ
ている人々であった。」（パウロの生涯からのスケッチ 262）

「船員たちは一般に太陽と星の位置によって航路を定めた。だから太陽や星が出
ていないで、あらしの兆候があるときには、船主たちは海へ出ることを恐れた。一
年の一時期でも、安全な航海はほとんど不可能であった。

使徒パウロはいま、イタリアへの長い退屈な航海の間、鎖につながれた囚人とし
て、彼の運命にふりかかる苦しい経験を耐え忍ばねばならないことになった。……
アリストアルコについて『一緒に捕われの身となっている』と述べているが、彼は苦
難の中にあるパウロに仕えるために、自ら進んでパウロと共に捕われの身になった
のである（コロサイ 4:10）。（患難から栄光へ下巻 129, 130）

2. 危険な航海

- a. パウロが、ローマへの航海で彼を監督していたユリアスから、すぐに得た当然の信頼を、何が明らかにしていますか（使徒行伝 27:3）。

「健康の弱っていた使徒パウロは、この〔自分の友人のところへ行く〕許可を非常に感謝した。」（患難から栄光へ下巻 130）

- b. 航海はどのように進みましたか。そしてパウロは何を警告しましたか（使徒行伝 27:4-10）。

「船は逆風に会い、目指す進路から押し流されて、なかなか進めなかった。……彼らは、順風になるのを待つためにしばらくのあいだ『良き港』にとどまらざるを得なかった。冬がかけ足で近づいていた。『すでに航海が危険な季節になったので』、船の責任者たちは、航海に適した時季が終わる前に目的地に着くという望みを、あきらめなければならなかった。『良き港』にとどまるか、冬を過ごすにもっと好適な場所に行くかという問題だけを、今決定しなければならなかった。

この問題が熱心に論議されてから、最後に百卒長からパウロに伝えられた。パウロは既に水夫や兵士たちの尊敬を得ていたのである。使徒は、ここにとどまるようにと、ためらわずに忠告した。」（同上 130, 131）

- c. 最終的に何が決定されましたか。しかし、どのような結果になりましたか（使徒行伝 27:11-17）。

「百卒長は大多数の意見に従うことに決めた。……

嵐に吹き流されて、船はクラウドという小島に近づいた。そして、そこに避難している間に、水夫たちは最悪の事態のために準備した。船が浸水した場合の唯一の脱出手段に用いる救命ボートが引かれていたが、今にもたたきつけられてばらばらになりそうであつた。彼らの最初の仕事はこの小舟を甲板に引き上げることであつた。それから、船を補強して嵐に耐えるようにするために、できるかぎりの予防措置がなされた。小島の陰でほんのわずかの間、守られていたが、それも長くは続かず、すぐさま彼らは再び暴風の猛威にさらされた。」（同上 131）

3. 絶望している者への希望

a. 海で起こった苦闘について述べなさい (使徒行伝 27:18-20)。

「夜中、大嵐に荒れ、船は漏れ出した。翌日、船に乗っている者はみな一兵士も、水夫も、乗客も、囚人も——一致して捨てられるものはみな海に投げ入れた。再び夜が訪れたが、風は勢いが衰えなかった。嵐に打たれた船は、粉碎した帆柱と裂けた帆で激しい強風にあおられながらあちらこちらへ揺れ動いた。毎瞬、船が揺れ動き、嵐の衝撃の下で震えるときに、きしむ柱が壊れるかのように見えた。漏れが急激に増し、乗客と船員はポンプで働き続けた。船に乗っている者には一瞬たりとも休息はなかった。…14日間助けなく、希望もなく漂っていたために、太陽も星もない天の下で悲観的な無気力がこれらの三百人の魂の上にたれこめた。彼らには料理する手段がなかった。火も灯すことができず、道具は水で船外へ流されていた。そして蓄えのほとんどは、水に浸り、損なわれた。事実、彼らの良い船が嵐と組み討ちしている間、波が死を語り、だれも食物を望まなかった。」(パウロの生涯からのスケッチ 265)

b. パウロはこの時何をしましたか。そしてどのようにして、すぐに船内のすべての人に希望をもたらすことができましたか (詩篇 55:22; 56:3; 使徒行伝 27:21-26)。

「周りのすべての人が速やかな滅亡しか見えなかったときに、この神の人は、責められるところのない良心をもって平静さのうちに、彼らのために真剣な嘆願を注ぎ出していた。」(同上 266)

「[パウロ] は信仰によって、無限の力であられる神のみ腕にすがり、心は神に支えられた。自分自身のために心配することはなかった。ローマでキリストの真理のあかしをするために、神が生かして下さることを知っていた。しかしパウロは、罪深く、墮落して、死の準備もできていない周囲のあわれな魂を切に思いやる気持ちになった。彼らの生命を助けてくださるように熱心に祈ったとき、彼の祈りがきかれたことを示された。」(患難から栄光へ下巻 133)

「身体的には、彼らのうちで最も苦しんでいた人[パウロ] には、最も暗いときのために希望の言葉があり、すべての危急時に助けの手があった。」(パウロの生涯からのスケッチ 266)

4. 差し迫った危険

- a. 利己的な船員は（他の人は救わず）自分の命だけを救おうとして、どのような欺瞞的な試みを始めましたか（使徒行伝 27:27-30）。

「〔乗客と船員〕は今や、自分たちの船がどこかの岩に囲まれた岸辺に乗り上げるといふ新しい危険に脅かされていた。彼らはただちに四つの錨を投げ入れた。それが唯一でできることであった。その夜、残る時間を通じて、彼らはいつでも最期が訪れうることを承知しながら待った。漏れは絶えず増していた。そして、船は錨を降ろしてはいても、いつ沈むかもしれなかった。

ついに雨と嵐を通じて、薄暗い光が彼らのやつれて青ざめた顔を照らした。嵐の海岸線がうすすら見えたが、なじみのある目印は一つも目につかなかった。利己的な異教の水夫たちは、船と船員を捨てて、非常に苦勞して乗せたボートに乗り込んで自らを救おうと決心した。船の安全を確保するために何かもっとできることをしているふりをしながら、そのボートを海に下ろし始めた。」（パウロの生涯からのスケッチ 267, 268）

- b. パウロは彼らの成功しなかったはずの企みを、どのようにやめさせましたか（使徒行伝 27:31）。

「〔利己的な異教の水夫たち〕が成功していたら、彼らは岩に打ちつけられて粉碎していたことであろう。一方、乗船していたすべての人は、沈む船を扱いきれずに減っていたことであろう。

このときに、パウロは低俗な計画に気づき、危険を防いだ。彼のいつもながらの即座の精力と勇気をもって、彼は百卒長と兵士たちに言った。『あの人たちが、舟に残っていなければ、あなたがたは助からない』。神を信じる使徒の信仰は揺るがなかった。彼には自分自身が守られることについて何の疑念もなかった。しかし、船員の安全は、彼らが忠実に義務を遂行するという条件つきであった。」（同上 268）

- c. どのように、今でさえ、使徒が元気づけていたかを説明しなさい（使徒行伝 27:32-38）。

5. まさに予告通り

- a. 最終的な難破について述べなさい (使徒行伝 27:39-41)。
- b. 神はどのようにして奇跡的に船上のすべての人の命を守られましたか (使徒行伝 27:42-44)。

「パウロと他の囚人たちは、こんどは難破より恐ろしい運命におびやかされた。兵士たちは、陸にあがる努力をしている間は、囚人たちを監視するのが不可能なことを知った。みんな自分の生命を救うことだけが精いっぱいであった。だがもし囚人のだれかが行方不明になれば、その責任を持っていた者たちは、罰として命を取られるのである。だから兵士たちは囚人たちを全部殺してしまいたいと思った。ローマの法律ではこの残虐なやり方が認められていた。この計画は、みんなが一樣に恩義を受けていたパウロがいなかったら、即刻実行されていただろう。百卒長のユリアスは、パウロのおかげで船の全部の人たちの生命が助かったことをみとめ、その上、主が彼と共におられることを確信していたので、パウロに害を加えることを恐れた。そこで彼は、泳げる者はまず海に飛び込んで陸に行き、その他の者は、板や舟の破片に乗って行くように命じた。こうして、全部の者が上陸して救われたのであった。」(患難から栄光へ下巻 135, 136)

「名簿が読み上げられた時、一人も欠けた者はなかった。三百人近い人々―水夫、兵士、乗客、そして囚人―が11月のその嵐の朝マルタ島の岸辺に立った。そしてそこには、パウロとその兄弟たちと一緒に、彼らの命を守り、非常に大きな危機の中を無事に陸に着かせてくださった神に感謝する者たちが何人かいた。」(SDA バイブル・コメント [E・G・ホワイト・コメント] 6 巻 1067)

個人的な復習問題

1. 神は鎖でつながれていたパウロになされたように、どのようにわたしの重荷を軽くしてくださいましたか。
2. わたしは、どのように不都合な警告を拒む危険のうちにいるかもしれませんか。
3. 船に乗っている異教徒に対するパウロの配慮から、わたしは何を学ぶことができますか。
4. なぜ救命ボートを用いた利己的な策略は、決して成功しないはずでしたか。
5. パウロの預言がいかに正確に成就したかということから、わたしは何を学ぶべきですか。

榮譽の鎖につながれて

暗唱聖句：「そこで、あなたがたは知っておくがよい。神のこの救の言葉は、異邦人に送られたのだ。彼らは、これに聞きしたがうであろう。」（使徒行伝 28:28）

「〔迫害の力〕は、心と良心に及ぼす真理の言葉の作用を妨げることはできない。パウロは縛られるかもしれない。彼は鎖につながれた囚人になるかもしれない。しかし、神のみ言葉を縛ることはできない。それはつかわされた働きを成し遂げるのであり、人間の力がそれを妨げることはできない。」（ビュー・アンド・ハルド 1888 年 9 月 11 日）

推奨文献： 患難から栄光へ下巻 135-146, 191-193

日曜日

9月19日

1. マルタ島にて

- a. 難破した人たちはマルタ島でどのように受け入れられましたか？そしてパウロがすぐに神の力を表すのを可能にしたのは何でしたか？（使徒行伝 28:1-6）

「〔パウロ〕の手で、木を運んできて、凍えて難破した乗客のために火をたいた。彼らがパウロの手を毒蛇がかんだのを見たとき、彼らは怯えた。しかし、パウロはそれが自分を害することはありえないことを知っていたため、落ち着いてそれを火の中に投げ落とした。なぜなら、彼は神に絶対的な信頼を置いていたからである。」（今日のわたしの生涯 334）

- b. どのような方法で主はパウロが島の住民に奉仕する機会を備えてくださったかを説明しなさい（使徒行伝 28:7-10）。

「三か月のあいだ船の同乗者たちはマルタ島に滞在したが、パウロと彼の共労者たちはその間、幾度も機会を捕らえて福音を説いた。主はすばらしい方法で彼らに働きかけられた。パウロのために、難破船の同乗者たち全員が手厚くもてなされ、」（患難から栄光へ下巻 137）

2. 記憶に残る瞬間

- a. 旅が再開されたとき、ポテオリにどのような祝福がありましたか（使徒行伝 28:11-14）。

「ここに数人のクリスチャンがいた。彼らはパウロに七日間滞在するように頼んだ。この願いは親切な百卒長に許された。」（患難から栄光へ下巻 138）

- b. ローマでの驚くべきパウロの到着について述べなさい（使徒行伝 28:15, 16）。

「百卒長ユリアスは、自分の力で与えられることは何でも使徒に与えたが、囚人としての状態を変えてやることや、番兵と鎖でつながれている彼を解き放すことはできなかった。パウロは重い心で、長い間期待していた世界の首都への訪問に出発したのである。彼が予期していたことは何と事情が違っていることであろう。鎖につながれ、汚名を着せられている身で福音をのべ伝えるとは何ということであろうか。ローマで多くの魂を真理へ導きたいという彼の希望は、当てはずれに終わる運命にあるように思えた。

ついに旅行者たちは、ローマから四十マイルのところにあるアピオ・ポロに着く。彼らが大通りにむらがる群衆をわけて進んで行くと、かたくなな顔つきをした犯罪人と一緒に鎖につながれた白髪の老人は、多くの人々の侮蔑的な流し目を受け、多くの無礼な嘲笑のまとなる。

突然歓喜の叫びがきこえたかと思うと、ひとりの男が通りがかりの群衆の中からとび出してきて、その囚人の首にしがみつき、あたかも息子が長い間留守をしていた父を迎えるかのように、涙とよろこびをもって抱きしめる。多くの者が愛情のこもった、しかも待ちかねたようなまなざしで、この囚人こそ、かつてコリントで、ピリピで、エペソで自分たちにいのちのこばを語ってくれた人だと認めるや、そのつど同じ光景が繰り返される。

心の暖かい弟子たちが福音の父のまわりに熱心にむらがるたびに、一行は全部立ち止まってしまう。兵士たちは遅れるのでいらいらするが、この楽しい面会を邪魔しようとは思わない。彼らもこの囚人を尊敬し重んじるようになっていたからである。弟子たちは、そのやつれた、苦勞の刻まれている顔に、キリストのみかたたちが反映されているのを見る。彼らは、パウロを忘れたこともなければ、彼を愛する心にも変わりがないということ、また、彼らの生活を生き生きしたものにし、神に対する平和を与えてくれるよろこばしい望みが持てるのは、彼のおかげであるということ、自信をもってパウロに伝える。彼らは、特別に許されさえすれば、町までの道をずっと、愛の熱情に燃えて、パウロを肩にのせて行くであろう。

パウロが兄弟たちに会って『神に感謝し勇み立った』と述べているルカの意味深長な言葉に気がつく者はほとんどいない。」（同上 139-141）

3. 任務のために強められる

- a. パウロは後に、彼がローマで受け入れられた方法からどれほど慰められたかについて、どのように表現するようになりましたか（テモテ第二 1:16, 17）。

「パウロの鎖を恥とせず、かえって同情して泣く信者の群れの真中にあって、使徒は声高らかに神を讃美した。彼の心にたれこめていた悲しみの雲は一掃された。キリスト者としての彼の生涯は試練と苦難と失望との連続であったが、このとき彼は豊かに報いられたと思った。彼は一層しっかりと足を踏みしめ、よろこびに心はずませて、彼の道を歩みつづけた。彼は過去について不平を言わず、未来を恐れもしなかった。投獄と患難が待ち受けていることを知っていたが、彼はまた、もっと恐ろしい無限のなわめから魂を救うことが彼の仕事だということを知っていて、キリストのために受ける苦しみをよろこんだのである。」（患難から栄光へ下巻 141）

- b. もう一度、自分の命を危険に陥れるかもしれなかったにもかかわらず、三日のうちに、パウロはローマですぐに何をしましたか（使徒行伝 28:17-20）。

「ローマで百卒長ユリアスは、囚人たちを皇帝の侍衛の長に引き渡した。ユリアスがパウロについてよい報告をしたのと、フェストの手紙のおかげで、パウロは隊長から好意を示され、獄に放り込まれず、自分の借家に住むことを許された。やはり番兵をつけられてはいたが、パウロは自由に友人たちに会い、キリストのみわざの進展のために骨折ることができた。

その数年前にローマから追放されていたユダヤ人が帰ることを許され、今は、数多くのユダヤ人がローマにいた。パウロは、彼の敵がはいりこんできて、この人々の心を自分にそむかせる機会を得る前に、まずこの人々に自分と自分の働きのことを話そうと決心した。そこでローマに着いて三日後に、主だった人々を呼んで、自分が囚人としてローマにきた理由を簡単に率直に説明した。……

パウロは自分がユダヤ人から受けた辱めや、彼らが繰り返し彼を殺そうとしたことなどは、何も言わなかった。彼は用心深く、思いやりのある言葉で語った。人をひきつけたり、同情を求めたりしているのではなく、真理を弁護し、福音の栄えを保とうとしていたのである。」（同上 142, 143）

4. もう一度証をする

a. ユダヤ人たちは、パウロの話にどのように反応しましたか (使徒行伝 28:21-23)。

「彼らが積極的にそれを望んだので、パウロは彼らに福音の真理を語る事ができる日取りを決めさせた。きめられた日に多くの者が集まったので、『朝から晩まで、パウロは語り続け、神の国のことをあかしし、またモーセの律法や預言者の書を引いて、イエスについて彼らの説得につとめた』。彼は自分の経験を話し、簡潔に、誠実に、力強く、旧約聖書から論証を与えた。

使徒は、宗教が、慣習や儀式、信条や理論のうちにあるのではないことを教えた。もしそうだとしたら、生まれながらの人は、この世のことを理解するように、調査することによってそれを理解できるはずである。パウロは、宗教とは実際の救いの力であり、完全に神から来る原則であり、魂に働きかける神の再生力を個人的に経験することであると教えた。

パウロは、モーセがいかにも、イスラエルの民が耳を傾けなければならないあの預言者としてキリストを指し示したかということや、すべての預言者たちが、罪に対する神の偉大な救済として罪人の罪を負って下さる罪のないかた、キリストについて、いかにあかしをしてきたかということを教えた。パウロは彼らが型や儀式を重んじているのを誤りであるとは言わなかったが、彼らが儀式的な礼拝を厳密に保持しようとするあいだは、そのすべての制度の本体であられるキリストを拒んでいるのだということを示した。」(患難から栄光へ下巻 142-144)

b. パウロの益となるようにこの集会はどのように終わりましたか (使徒行伝 28:24-29)。

「パウロがローマに着いてかなりの月日がたってから、エルサレムのユダヤ人たちがこの囚人を直訴しにやってきた。彼らはこれまで何度も自分たちの計画をくじかれてきた。しかも今度はパウロがローマ皇帝の最高法廷によってさばかれることになっていたので、彼らはまたもや敗北を被るような危険は冒したくなかった。ルシヤもペリクスもフェストもアグリッパも、みなパウロの無罪を信ずると宣告した。パウロの敵たちは陰謀によって皇帝を動かす以外に成功の望みはなかった。彼らの計画を練って実行する余裕を見るためには、遅延が彼らの目的を促進することになる。そこで彼らは、使徒を直接告発するのをしばらく見合わせていた。」(同上 145)

5. 擁護された神の真理

- a. パウロが後に殉教する前に、彼は何をすることができましたか。そして彼は何を宣言することができましたか（使徒行伝 28:30, 31; テモテ第二 4:6-8）。

「こうして、一見活動的な働きが絶たれたように見えたが、パウロは、以前のように諸教会を自由に訪問して歩いた年月よりもっと広い、永続性のある感化を及ぼした。」（患難から栄光へ下巻 146）

- b. 来るべき日に何がわたしたちを強めますか（詩篇 76:10; 119:126）。

「神は、破滅を避ける望みがほとんどないように見えるときに、いつもご自分の民のために最大限度まで働いてこられた。悪人たちの計画、教会の敵たちは、神のみ力と支配する摂理の下にある。このお方は議員の心を動かすことができ、もしそうお命じになるなら、乱暴な者や不満を持つ者の怒り、神やその真理やその民を憎む者たちを、あたかも川の水の向きを変えるように、かわすことがおできになる。祈りは全能者のみ腕を動かす。星を天で秩序正しく先導し、その言葉が深淵の波を支配なさるお方、同じ無限の創造主が、もしご自分の民が信仰のうちに呼び求めるなら、彼らのために働いて下さるのである。このお方は警告が世に伝えられ、その警告に注意を払うすべての人が戦いの準備ができるまで、闇の力を抑制して下さる。

〔詩篇 76:10 引用〕。神は、テストとなる真理が前面に持ち出され、たとえその真理にもたらされる軽蔑を通してであってさえも、それが吟味と議論の主題となるように意図しておられる。民の思いがかきたてられなければならない。すべての論争、すべての非難、すべての中傷は、質問を引き出し、それ以外の方法では寝ている思いを起こすための神の手段である。」（教会への証 5 巻 452, 453）

個人的な復習問題

1. 困った状況は、どのように好機を提供するかもしれませんか。
2. パウロの手紙が信者たちに及ぼした力を、何があわらしていますか。
3. 神はパウロのローマ到着のようなできごとを、どのようにわたしたちを引き上げるためにお用いになりますか。
4. パウロのどの経験が、神のタイミングは完全であることをわたしたちに思い起こさせますか。
5. 神は難しい状況の中で真理を広めるために、わたしをどのようにお用いになることができますか。

第一安息日献金



7月3日

インド、アッサム、ディブルガル
の礼拝堂と教会学校のために
(4 ページ参照)

8月7日

世界総会教育支部のために
(30 ページ参照)



9月4日

ドミニカ共和国の礼拝堂のために
(51 ページ参照)